

### 3. 第2セッション報告

#### 「生涯学習と大学教育の接点を求めて」

これまで、放送公開講座の実施を通じて、放送メディアの特性を最大限に生かしながら、いかにして大学教育の開放を促進し、生涯学習の要請に応えることができるかを模索してきた。また、同時に大学における教育方法の改善の一環として、放送公開講座の大学教育への活用についても検討を試みてきた。これは、まさしく「生涯学習と大学教育との接点を求めて」の歩みであったといえる。

そこで、大学教育の開放の視点から生涯学習への接点を求めた〔放送公開講座番組〕と、生涯学習の視点から大学教育への接点を求めた〔実験番組〕とを手掛かりとして、第1セッションの討議と3種類のモニターへのアンケート調査結果等を踏まえ、会場の出席者の参加も得て、生涯学習への活用と大学教育への活用という二つの課題に適応した放送公開講座のあり方を探った。

なお、ここでは、このセッションにおけるパネリストの報告と意見及び会場の参加者も含めた討議の内容等についてとりまとめ報告する。

《司 会》	江 藤 孝(熊本大学学生部長)
《パネリスト》	今 江 正 知(熊本大学教養部教授)
	大 塚 雄 作(放送教育開発センター助教授)
	緒 方 良 雄(熊本県菊池市立菊之池小学校長)
	小 林 靖 雄(放送大学副学長)
	光 永 一 三(株式会社熊本放送テレビ局制作部長)

#### ○総合司会(アナウンサー)

ただいまから第5回放送利用の大学公開講座シンポジウム第2日第2セッションを開始いたします。

第2セッションのテーマは「生涯学習と大学教育の接点を求めて」ということでございます。

第2セッションの司会は熊本大学江藤孝学生部長でございます。

江藤先生お願いいたします。

#### ○司会

おはようございます。

それでは、まずパネリストの紹介をさせていただきます、それから進行について若干説明するという順序でいきたいと思っております。

発言の順序で熊本大学の教養部の教授の今江正知教授でございます。講座の担当は環境科学です

が、ご専門は植物学でございます。

その隣が熊本放送のテレビ局の光永一三制作部長でございます。

そのお隣が放送大学の小林靖雄副学長でございます。ご専門は経営学でございます。

その隣が熊本県菊池市立菊之池小学校の緒方良雄校長でございます。県の社会教育課において、現在は小学校のほうで現職についておられます。

私のすぐ隣が放送教育開発センターの大塚雄作助教授でございます。ご専門は教育心理でございます。

私、司会の江藤でございます。よろしく願いいたします。

まず、進行の順序でございますが、まず、10分程度番組説明を行いまして、それから50分、25分番組を2本視聴していただきます。そして10時から60分間パネリストに報告をいただく。報告は大体1人10分程度ずつと考えております。

番組説明のほうは民間放送教育協会の井出定利プロデューサーをお願いいたします。よろしく願いいたします。

#### ○井出（民間放送教育協会）

これから作品2本を視聴していただくわけですが、それに先立ちまして内容を簡単にご説明しておきます。

1本目は「野菜は文化財」——「台所の科学」の中の一番最初の作品で、皆様のお手元にテキストの内容がっておりますが、「野菜は文化財」、大体の構成は、最初主任講師の有富先生が13本のねらいを話されまして、約2分ちょっとだと思いますが、それから今江先生の講義が始まりまして、これから進めていく野菜の定義、野草との違い、それから野菜はいつ、どこからきたのかという栽培植物の起源を話されまして、そのあと内容としましては栽培植物の特性、たとえば野草の植物よりも種が散りにくいという特徴的なことがあげられております。それから栽培植物が日本にいつごろ伝わってきたのかという歴史的な視点で話されまして、最後に、そのテキストに載ってはおりませんが、先生のご専門の「野菜の花と実」というところがテレビのほうでは構成の中には入っておりまして、そういう形で放送はなっております。

それから「野菜の形態学」は、テキストには載っていませんけれども、テレビのほうに入りました「野菜の花と実」のところを拡大してかつ深めるという形で演出的にはとらえられると思いますけれども、「野菜の形態学」は、イントロから第1章「種子植物の器官」「種子植物の根」「種子植物の茎」「種子植物の葉」それから「花と果実その1」「花と果実その2」というふうになっておりまして、われわれが一般に見かける野菜を形態学的にみていくという、しかも今井先生が野菜を次から次へと切りながら見せていくという大へんユニークな作品になっております。

それを全部見ていただくというのは時間的に無理ですから、一切カットしないで、25分以内ぐらいのところまでフェードアウトするかして終わると思いますけれども、そんな構成を頭に入れて見ていただけたらと思います。

よろしくどうぞ。

## 〔「野菜は文化財」、「野菜の形態学」VTR映写〕

### ○司会

2つの番組をそれぞれ25分程度のところで切っただけで見ていただきましたが、本来なら全体をご覧いただきご検討いただくのがいいのですけれども、時間の都合でそういう形にさせていただきました。

手法の違い等もお気付きになったと思いますが、井出プロデューサーにちょっと補足をお願いしたいと思います。

### ○井出

肝心のことをご説明申し上げなかったのですが、1本目が「台所の科学」で放送された分です。2本目のほうが「生涯学習と大学教育の接点を求めて」というところで実験的につくった作品です。このあと先生が葉っぱから花へ及んで次から次へと野菜を切りながらご説明がありますけれども、いま江藤先生からお話がありました、全部ご覧になっていただけないのが残念ですが、ほぼ8割ぐらいの感じではつかめていただけるのではないかと考えております。

### ○司会

印刷教材について若干申し上げますと、「台所の科学」という印刷教材の一部がお手元に届いていると思いますが、そこに13回分のタイトルだけが出てまいります。そして前半で視聴していただきました「野菜は文化財」にあたる部分が内容的にございます。後半部分の実験番組については印刷教材をあらためてつくっておりません。その点もご注意いただきたいと思います。

私どものほうで考えました視点というのは、一つは大学教育の開放を促進して生涯学習の要請に応えるにはどうしたらいいかというのが1点。もう1点は、大学における教育方法の改善の一環として、放送公開講座の大学教育への活用をどのようにやっていくかというのがもう1点で、この2つの視点から本日のシンポジウムに迫ってみたいと考えております。

「野菜は文化財」のほうは、いま紹介がございましたように、大学教育の開放の視点から生涯学習への接点を求めた番組であると位置づけることができるとと思いますが、実験番組のほうは、生涯学習への視点から大学教育への接点を求めてみた。「野菜の形態学」の方法はそういう位置づけができると思います。

そこで、まずパネリストのうち、今江先生に担当講師の立場から、「野菜は文化財」と「野菜の形態学」との両番組について学習のねらい、あるいは番組と印刷教材との関連等について解説をしていただき、さらに先生が主任講師として実施された昭和60年度の本学のテレビ科目の「水と人間」、これも授業への活用ということで試みられておりますので、そういうものも踏まえたくていろいろ検討していただく。

次に光永制作部長には、制作者の立場から両番組、ことに実験番組について制作者のねらい、放送メディアの特性がどのように生かされたかということについて解説をいただき、そして生涯学習と大学教育という2つの課題について、両番組の活用についての検討をしていただく。

それから、小林先生には、放送大学の立場から解説をいただくわけですが、ご専門が経営学という

ことで、一般視聴者としての目をも加えて、放送大学の番組のねらいと放送公開講座のねらいにどのような関連する部分、あるいは違いがあるか。そして放送公開講座のあり方について言及していただく。また両番組の成否についてのご意見をいただければと思っております。

また、緒方先生には、一般視聴者の立場からということでお話をうかがいますが、熊本県の社会教育行政に携われた経験がございますので、その経験も踏まえて両番組を中心に放送公開講座のあり方についてご意見を述べていただく。

最後に、大塚先生には、両番組をそれぞれ独立に熊本の一般視聴者、熊本大学の学生、放送大学の学生の3つのグループに視聴していただいておりますので、そのアンケート調査結果を報告していただいて、番組の制作上の違いがモニターにどのように受けとめられたかということを探っていただく。

そして生涯学習と大学教育についてご提言をいただくというように考えております。

その他、それぞれご意見があるかと思えますけれども、特に今江先生は、すべて今江先生の番組が素材になりますので、いろいろと話題に乗ることになりますけれども、このへんはご寛容いただいて、できれば忌憚のないご意見をフロアからもいただきたい。あまり今江先生にご配慮が行き届き過ぎますと言にくい点も出てくると思いますが、十分に先生にお願いしてございますので、一つパネリスト同士でも、またフロアでも忌憚のないご意見を出していただいて、何らかの成果が出ればと思っております。

それではまず今江先生にご報告をお願いします。

#### ○今江（熊本大学）

江藤先生から話がありましたが、人様の前にさらすような顔じゃないのを1時間近くもさらしまして、しかもここでそれが話題になるということで、なぜここに座っているか自分でもよくわからぬのです。何か流されているうちにだんだんこうなって、熊本弁でこういうのを「きゃーなった」といいます。結果としてこういう状態になってしまったということです。アンケートの設問がきたときに私は腹が立ちました。何でおれだけがこんなに皆からも、皆は高いところから冷静に客観的にご批判なさる材料に、なぜおれだけがならにゃいかぬのか。最初のうちはほかの番組も一緒にあるということで、しかも1本は「野菜は文化財」は使うけれども、あと1本は別につくるのだから2分の1か4分の1、ちょっとお手伝いするだけのつもりが私だけになって、だいぶ文句も言いました。しかしこうなってしまうでしょうがありません。こういうことも、しかも今度は初めての試みということです。私もあちこちにだいぶ文句を言いました。なんでこんなばかばかしいことをせにゃいかぬのかと。言いたいだけ言いましたので、今度は皆さんで言いたいだけおっしゃっていただいて、せめてこれが今後の番組をつくる時の何か少しでもお役に立てれば恥かいた甲斐があるとも思って、まあ、そういうつもりです。

私自身、視聴覚教育の専門家でも何でもありません。ただの植物屋です。視聴覚関係で学生時代に映画が好きだったから映画はよく見にいったけれども、映研に入るほど真面目でなかったという程度です。ただ60年に「水と人間」という番組を主任講師で、これもまた妙なことでわいわいやっていた

るうちに、お前がしろと押しつけられたわけです。皆とわいわいやってつくって、大へんな目にありました。こんなきついものだとは思っていませんでした。ただ、つくっていくうちに、放送局といっしょにわあわあやっているうちに、熊本というのは幸いなことに人の悪口をうまく言うとはめられるお国柄ですから、わりとざっくばらんなものの言い方もお互いにできるようになって、「先生ばかねえ」なんてことも言われまして、つくってきまして、いい経験になったと思います。そんななかで、これだけ手間のかかったのをいっぺんやって終わりにするのは余りにももったいないと思いましたし、教養部で総合科目の担当をしておりますから、総合科目でできないか、規則上のことやいろいろなこともありますけれども、私担当だったからみんな口説き落としまして、1年間の総合科目の講義に使いました。部分部分で使う例はありますが、全部まとめて使うというばかなことをしたのは、そもそもの失敗のもとだったと思います。

学生たちに45分のテープを見せる。そして全部番組に出ていただいた先生に担当していただいて、そして先生方の中で少し反対がありましたけれども、無理にお願いしたのは、何しろビデオをちゃんと見てもらわぬとしようがないんだから、無理やり見させましょうよ。見たことについて学生に書かせましょうよ。書かせると何か出てくるのじゃないかと思います。くらいの大へん荒っぽいことで、1年間の30回の講義、試験その他で欠けますから13回が26回、大体ちょうどいい数にもなるのです。そういうふうにはめまして、1回が100分ですので200分の講義、45分見せて、そのあとの残りの時間は見たものについて書かせる。そしてその次のときには書かせたものをもとにして、体系的なかつこうで話をするとか、学生の誤解を解くとか、いろいろな形で使いました。

そういうことで、私は放送に使ったものが完全に大学教育に使えると思って使いましたし、今でもそのとおりに思っております。一番大事なのは、学問のレベルがどうこうという話が出ますけれども、つくったものを学校の講義にどれだけお使いになるかということが一番基本じゃないかと思っています。物事の切り方が少し違う。話の進め方が少し違うだけで、基本において大学教育と生涯教育というのはそんなにひどく違っているのじゃないというのが、今になってつくり終わったあとで思っております。つくるまではそれほどわかりませんでした。といいますのは、学生に書かせて、ということをする。そのときにどう違うかといいますと、映像でやると非常に強く訴えができます。私自身が植物屋で、博物学的な要素を持った部分をやっているからよけいそうなるのかもしれませんが、けれどもいろいろなものを見せる。そしてそこから考えさせるということをするのだったならば、放送に使った生涯教育用というものがそのまま使えるし、というのを今までも思っております。

ちょっと話がちらんぼらんでうまくまとまりませんけれども、大体まとまってつくったわけじゃないものですから、そんな状態です。

つくるときが一番大事なのは、その番組の中で、何を視聴者に理解してもらいたいと思うか。それをどのように理解してほしいと思うか。これをできるだけ突っ込んでおくことじゃないかと思っています。その意味ではディレクターに恵まれまして、これが大へん柄の悪い男で何とでも言っています。私も何とでも言いましたけれども、向こうは私のほうが悪いといいますけれども、私は、相手のほうが悪かったと思っております。

やっているなかで野菜を主題にする。野菜というと大体食べるものだという話をだれでもする。だから食べ方、料理の仕方、栄養がどうだ。それはみんな人間の都合で考えているので、その話は今度はないよと言いました。そうすると、どうやったら上手に栽培できるかという話、これもたくさんあります。土の話、肥料の話、日照の話、温度の話、農薬の話……。その話も今度はない。それから流通の話、どうしたら安くできるか。これもものすごく大きな問題ですが、その話もしない。結局、進化論の立場という大袈裟ですけども、進化ということと人間の品種改良ということとからめたとこでしか植物の話はできないから、そのところで話をすることによって、最初の番組をつくりました。それをアナウンサーとの対談のなかでやっていくという形を、ディレクターの指示で撮ったわけです。

その次にもう1本のが、これこそ全然したくないのに押しつけられたところです。しかも年の暮れが押し迫ってきて、だんだん話が曲がったかっこうで――私は曲がったような気がしましたが、押しつけられてきたので、物もない。1年か2年余裕があれば、実際の現場で育っていくいろいろな過程の画などもそろえながらの話もできたと思いますけれども、それをやって、野菜というのは食べ物じゃなくて生き物である。生き物だからちゃんとしたからだの構造がある。根・茎・葉という話をする、それは小学生、中学生の話題じゃないかという人がいますけれども、根・茎・葉だって大学生レベルの話は山ほどあるし、学問の最先端の話も山ほどあるわけです。動物は中枢神経系があって、そのコントロールのもとに一つの固体ができて一つの形ができますから、中枢神経の指令の云々ということによって形ができるのがある程度理解しやすいけれども、植物というのはただ細胞が集まっているだけで中枢神経はない。全くの無政府状態の細胞が集まってもたまたましている間に、結果としてああいうかっこうになるわけです。そのへんのところは未だに形態学のなかで答えは出ていないような問題です。その野菜の根・茎・葉の形もどこで話すかということ、何を理解させようということによってレベルは決まると、また開き直ったようですが、終わったあとになって思ってきて、担当者の話としては非常におかしな話ですが、あまり気にしなくていいじゃないか、大学教育だ、生涯教育だというのは……。結局、何をどうわからせるかということとをどれだけ突っ込むかということが大事じゃないかと荒っぽいことを考えています。

熊大の理学部の生物学教室で、学生を毎年動物園に連れて行って半日つぶします。そして、象さんはでっかいな、キリンの首は長いなと、それだけで帰ってくるのが幼稚園で、同じ象とキリンを見せても、そこで何を考えて、何をしゃべるかという、そこを考えてくれば、動物園見学が大学教育になるわけで、大学院の教育にもなるわけで、結局それは映像という素晴らしく力を持ったものがある。それをどういうふうにするか。その意味で、私はいなかの大学におりますから、番組1本で完結させるというかっこうのことはどうしても考えられません。教室で学生としゃべることの中でしか教育してきてなかったものですから、動物園に連れていったら、そのあとでその話をします。学校の向こう側で植木市をやっています。これが大へんおもしろい行事で熊本の人間らしいのですが、植木の市だからという、市で苗を買わなければいかぬかというそうじゃなくて、あれは祭です。だから時々見かけます。「きょうは1本も買わぬぞ」といって見に来ている人がたくさんいるわけです。苗を買

うのではなくて植木を売っている景色を眺めて、お祭にみんな来ているようなのがありますけれども、これも学生を連れていって、そういうお祭で遊ぶ人、商売の人と違ったかっこうでのものをそこを拾ってということをしていますので、そんな大へん荒っぽいことですけれども、具体的にどんなことをやったかみたいなことや、そのところはどうか考えたからしたのかみたいなことは、ご質問でもあったらお話しすることで、基本的態度としてはまさに熊本弁で「ええころかげん」なところですが、そんなことで考えました。

#### ○司会

どうもありがとうございました。

押しつけの部分は私に対する批判だと思いますが、非常に寛大な先生ですので……。

いま生涯学習と大学教育は重なり合う部分があるというご意見をうかがいましたが、続きまして今度は制作者の立場から、光永部長にお願いいたします。

#### ○光永（熊本放送）

人前にさらす顔ではないと先生おっしゃいましたが、しみじみとここで2本番組を見せていただきますと、先生なかなかいい顔をしていらっしゃる。なかなかタレント性があるな、やっぱり先生にお願いしてよかったなど、あらためて感じている次第でございます。

実は実験番組をつくるというお話をいただきまして、果たしてわれわれのほうでそういうことができるかなと、ずいぶん迷いました。次に迷ったことが、どういう形にすれば、一度放送した「野菜は文化財」と比較できるような番組ができるかなということでございます。

それぞれ大学側、私どものほうと思感がございまして、こういう形ではどうだろうか、ああではどうだろうかという意見の交換をしております、そのなかで幾つかのパターンが出てまいりましたが、レギュラーの番組は、どちらかといいますと大学の組織の中でのペースでつくってもらっていますから、今度は放送局側のペースでつくってみたらどうですかというお話もいただきました。大へん理解のあるお話で、われわれとしてもそうしようかと多少傾きかけたのですが、実を言いますと大学という組織の中での公開講座ということでございまして、どうしても先生方との共同作業ということになりまして、ディレクターが1人で自分の考えを押し通すということもなかなか難しいことではございますが、そういうことで、どちらかという今度は講師も出ない、ナレーションもバックに入れてしまって、完全にVTRの構成ものにしたらどうですか、ドキュメンタリー風につくったらいかがでしょうというお話も江藤先生あたりからいただいたわけではございますが、実際的にはテーマを決めまして今江先生にお願いをする段階でいろいろお話をしておりましたが、先ほどどちらとうちのディレクターの話が出てまいりましたが、実はディレクターも大へん頑固な男でございますが、今江先生も大へん頑固でございます、大学教育をもう少し意識しなければいけないとおっしゃいまして、もう少し特徴のあるつくり方をしようということにしたわけです。どういうことかといいますと、もっと学問的に深みのあるものにしたらどうだろうとおっしゃいました。まずタイトルに出てきました「形態学」というこんな固いタイトルを、私は実は反対をしたわけですが、いやこれは講義に使ううえで「形態学」だからということで結局決まったわけではございます。何でこういう

ことを申し上げるかといいますと、番組に対する講師の先生の思い入れが番組を最終的に成功するかしないかの分かれ目になるのではないかという気がいたします。先生はどんな形であっても大学教育には使えるとおっしゃっていただいたのですけれども、やはり先生が番組としてこういうものを自分は訴えたいということがない限り、番組としては成功しないという気がいたします。

昨日ご報告・討論のなかで、広島大学のお話が出てまいりまして、中国放送のディレクターのほうからプロデューサー的な役割まで先生にやっていたというお話が出てまいりました。大へんけっこうなことじゃないか。そういう意味では先生にそれだけ肩入れをしていただいて、番組についてのご意見に入っていたかというのは大切なことじゃないかと思います。今回も今江先生にそういうことで大へん積極的に番組に取り組んでいただきまして、最終的にはご覧いただいたような形になったわけでございます。

生涯教育の必要性といいますか、欲求が大へん盛んになってきておりまして、この大会前に熊本市の社会教育課におたずねをして調べていただきましたが、熊本でも公民館活動が盛んだということでございます。ここ10年ぐらいの数字的な比較をしてみますと、熊本に特殊な公民館がございまして、地域公民館としまして、地域のまちの人たちが自分たちの自主的な判断でつくる、市の助成が多少ありますけれども、そういう公民館が10年前には173あったのが、10年後の今年度で258、1.5倍ぐらいにふえているということでございます。こういうところでいろいろな生涯教育に携わって学習などをしていらっしゃる方が、5年前で1万4,000人ちょっとということでして、それが現在2万7,000人近くにふえて約2倍ぐらいにふえているという数字が出ております。一つには平均寿命が大へん延びてきて、これは緒方先生のほうのご専門で、あとで詳しくお話をうかがえると思いますが、そういうことで社会教育とか、あるいは高齢者学級とかいろいろなものが出てきておりますが、どうも多少の疑問があります。生涯教育といいながらも、何といいますか、つまみ食いみたいなもので、結局知識の蓄積といいますか、全くランダムに集めていって、それが実際の生活のなかではあまり活用されてないという、まあ、それはそれで確かにいいと思いますけれども、もう一つ、いま情報化社会とか時代の流れがはやいとかがいいですが、たとえば昔は「十年一昔」といっておりましたが、今では「三年一昔」3年すれば社会の状況は変わってしまうという話もありますし、発言の要旨の中にちょっと書いてございますが、いま社会に流れている情報の15%ぐらいは毎年その情報が陳腐なものになってきているということをおっしゃる学者の先生がいらっしゃるわけですが、15%といいますと7年たちますと今ある情報がほとんど無駄なことになってしまうという計算になるわけでございます。そういうふうに非常に変化の激しいなかで、私どもが社会生活をしていくうえでは、どうしても大学を出ただけで、あるいは学校を出ただけですべてのものが満足できるということではない。年々情報を蓄えていかなければいけない、それでない時代が遅れていくということがあるわけですね。そういう意味で、そういう部分を補足するのがわれわれのマスコミの立場ではないかという気がいたします。

そういう意味で、多少なりとも番組のうえで皆様方にそういうご協力ができるのではないかということをお話ししておりますが、特に大学公開講座という一つのマスメディアを使った社会教育、生涯教



育の一環を担わせていただいているわけでございます。ただ、放送メディアとしては完全であるということはいえないわけでして、特徴は非常にあるけれども、弱点もあるわけでございます。その弱点をうまくカバーしていかなければいけないという気がいたします。

先ほど今江先生のお話のなかに、言いつばなしにしないで、講義のあとで作文を書かせるというお話をしていただきまして、私は大へんありがたいことだという気がいたします。そのとき映像を見ていますと印象としては非常に強烈に伝わりますけれども、そのあと何が残るかという、結局見たあとで何も残ってなかった。翌週は忘れてしまうという状況が出てくる。よく私どもはテレビで名画を見させてもらいますけれども、映画を見たあとで、それが何週間かあとで再放送されても、これはどこかで見たような映画だなと思いつつ最後まで見てしまうという、印象度が希薄の部分があります。それをそういう形で補足していただき、映像メディアの弱点をカバーしていただくということは大学でなければできないことじゃないか。それは生涯学習にももちろん使えるわけでございますが、そういう部分をやっていただきたいという気が確かにございます。

それから、非常に内容が画一的といいますか、一つのを手を変えて出すということはなかなかできないわけでございますが、いろいろな対象の方に見ていただくのに、一方的に画一的に放送しておりますので、それに対しての理解度もずいぶん違うと思います。そういう部分をどういうふうにカバーするか。これもまたこれから先、私どもが解決しなければいけないことだと思いますが、それには適切な指導者が必要じゃないか、リーダーが必要じゃないかということがございます。

時間的な拘束がございまして。放送というのはある一定の時間でしか放送しませんから、見落としてしまうと見れないという部分もございまして。ただ最近ビデオが発達しております、個人的には非常にビデオの利用というのはふえてまいりましたが、それが公の立場でビデオを後程一緒に見るというのはなかなかビデオの制作上の問題、著作権の問題その他出てまいりますので、困難性もあるわけでございます。そういうのを一つひとつこれから先、解決をしていかなければいけないだろうという気がいたします。

映像の特徴については、皆さん方ご存知のことと思いますけれども、瞬間的に映像が消えていきますけれども、強烈な印象を与えることができるということは先程申し上げたとおりでございますけれども、それと時間の延長拡大が簡単にできるということでございます。もちろん物体の拡大も縮小もできるわけでございますので、われわれが肉眼で見てなかなか判断のつかないような状況を手軽に再現をすることができる。あるいは見ていただくことができる。たとえばスローモーションだったり、あるいはクローズアップだったり、ストップモーションだったり、先ほどの番組の中でも出てまいりました顕微鏡写真というのもその一つだという気がします。ああいうのをいちいち顕微鏡をのぞきながらというのはなかなかたくさんの人を同時にというわけにはいかないわけですから、そういう意味では映像の非常な利点じゃないかと思えます。そういう利点を十分に活用していただき大学教育に使っていただく、あるいは生涯教育に使っていただくことが大切なことじゃないかと思えます。

ちょっと時間をオーバーしてしまいましたけれども、やはり大学教育と生涯教育の違いは、基本的に系統的に原則的に物事を分類して、そして伝えていくのが学問（大学教育）ではないかという気が

いたします。そのあたり、先程知識のつまみ食いと申し上げましたように、結果だけの知識の蓄積という形で、これが生涯学習の違う点ではないかという気がいたします。そういうふうな知識の蓄積だけではなくして、その原理原則がどういうところにあるのかということから出発して、新しい学問の分野に挑戦していくというのが大学教育で、社会教育との違いじゃないかという気がいたします。もちろん社会教育もそういう部分をこれから先は大事にしていかなければいけないという気がいたします。

どうも失礼しました。

○司会

ありがとうございました。

生涯学習と学校教育の関係から、生涯学習に対する放送の役割等にも言及していただきました。また後程ご議論いただきたいと思います。

続きまして放送大学の立場から小林先生にお願いいたします。

○小林（放送大学）

私は、役職の関係から、今まで少なくとも3回ぐらい公開講座のシンポジウムに参加をさせていただきました。その間に科研費をいただきまして、主として学習センターの機能のことでございましたけれども、公開講座をやっておられる北大へ皆でまいりまして、スクーリングなどのこともあわせて、かなり突っ込んで勉強させていただいたことがございます。そういう過去のことを思い出しまして、今回のテーマとの関連で考えさせていただきますと、ご承知のように放送大学はまさに生涯学習を大学教育としてやるのだということでございますので、大学教育と生涯教育の関係というのは最も密着しているのが放送大学自体だと思っております。特にいま放送大学が目前ではではございませんけれども、かなり近い感覚でとらえておりますのが全国化の問題でございます。そういうこととの関連では、この公開講座でいろいろ展開されているものに非常に大きな関心を私自身、それと放送大学の首脳部の方が感じていることは事実だと思います。

実は放送大学の学生もご承知のように、非常に生涯学習と一言で言えますけれども、多様な学生をかかえておるわけでございまして、4年以上在学して学士号を得ようという、大学では全科履修生とっておりますが、これが積み上がってまいりますために、現在の学生の中では60数%になってまいりましたが、ご承知のように1年間もしくは1学期という単位で、ある特定の分野だけを勉強していくような学生、こういうのも同時に学生として対象にしているわけでございます。そういう非常に多様な学生のニーズも違っているようなものに対して、ある一つの番組がどう対応できるのかというのは大へん大きな問題をもっているわけでございます。

それから、これも放送大学のたてまえでございますが、一番根幹に印刷教材をおいているということです。その印刷教材（テキスト）と放送教材との関係をどういう形でとらえているかというのは、必ずしも統一された見解をもっているわけではございませんが、大きな目から見まして、放送教材というものは、印刷教材で書いた担当者が言わんとするところ、あるいはここを理解してほしいというところを、テレビとラジオで大へんメディアが違いますけれども、その理解を何とか深めていただ

くためにいろいろな工夫を放送授業の中でやる。いわゆる印刷教材の中の理解の促進、あるいは援助、こういう意味合いを放送授業に何とかもたせる。もちろん学習のペースということもごさいますが、それよりも15回という放送大学の授業体系のなかで、それぞれの回で言わんとするところ、ねらっているところの理解の促進というところに一番のポイントがあるのだらうと思います。こういうことで授業の体系としまして印刷教材と放送授業との関係において考えているということごさいます。

今回私の役割としまして、「野菜は文化財」それから「野菜の形態学」の両方を見て、何か指摘しろということごさいました。私自身、こういう食物論等の専門でもごさいませんが、放送大学の立場というのも一つ頭におきまして、この2つの放送授業のつくり方を中心に若干の意見を申し上げたわけごさいまして、それはここに書いてあるとおりごさいますが、簡単に申しますと、印刷教材と両方を対比させて見られましたのは「野菜は文化財」のほうごさいます。これは大へんよく工夫されていると思います。1人で全部講義をするというやり方と、アナウンサーを入れての対話、対話のほうはずっとやわらかくなるように思いますが、「文化財」のほうは対話方式で、しかも非常に画像をうまく使われていると思います。それと印刷教材との関連で丹念に見てみたつもりごさいますが、印刷教材と放送授業が大へん相互補完的な役割を、これは先生のほうでどうおっしゃるかわかりませんが、私自身の感じとしましては、印刷教材で書いてあることで、かなり突っ込んで書いてあるところは比較的要点的に話される。図表等で印刷教材に出ているもので、説明がないものをうまく放送授業のほうで突っ込んで説明されている。大へん印刷教材と放送授業の補完性のようなものもよく考えてつくられていると思いました。

一方、熊本放送がつくられた「野菜の形態学」ですが、先程も制作者からのお話がありました。担当の先生も言われておりました、大へん余裕がなかったというお話ですが、私は、「形態学」のほうの意図が、昨日もちょっとうかがったわけですが、大学としての講義、いわゆる原理体系的を頭においたつくり方という意図があったのかと思いましたが、全体の印象としまして、ここに見せられたのはあくまでもサンプルというご意図と思いますが、なぜ42～3分の間に6章ぐらまでの中身を突っ込んでざっとやられたのかという点が十分理解できないわけです。放送が非常に時間的に限られているということで、本来は印刷教材なりテキストなりで講義をするが、サブにこういうものを見せるという意味で、1年間の講義、あるいは1学期の講義がどのぐらあるかしりませんが、その一部について放送を使うという意図なのかという気もします。要は、非常に混んだ内容のものを非常に短時間に、実物その他を使われて先生は苦勞されておられると思いますが、見聴きしている視聴者の側としては大へん忙しい。もうちょっと時間的に、内容は全部でなくていいから、突っ込んだ、ゆっくりした講義が聴きたかったという感じがするわけごさいます。

そういうふうに「形態学」のほうでは批判めいたことを申し上げましたが、放送大学、現在までに230数科目、ことしの63年度完成年度で何と275科目という大量の科目を放送に流しました。その間に、先ほども申しましたように常に印刷教材とペアでやる。しかも約半分はラジオでやるということごさいまして、放送のメディアを最初に申し上げましたような目的で、ほんとうに印刷教材との補完性等も考えて、十分つくられているかと申しますと大変<sup>むづか</sup>しいものがごさいまして、つく

るので精一杯ということでございます。もちろん学生のほうのいろいろな反響も聞いております。そういう意味で放送教育開発センターに大変ご努力を願ひまして、一昨年ぐらいから特に放送教材と印刷教材の補完性についての研究をやっていただいております、「文化人類学」「学校教育」等のシンポジウムで発表して皆さん方のご批判をいただいておりますが、今後の放送大学の一番基幹になります放送教材、印刷教材の中身につきましての、特に相互補完性についての研究をもっと進めていかなければならないと感じております。

大変まとまりのないことを申しましたけれども、以上感想で終わらせていただきます。ありがとうございました。

#### ○司会

ありがとうございました。

生涯学習そのものが大学教育となっているという放送大学の位置づけから、印刷教材と放送教材との相互補完性にまで言及していただきまして、また、両番組の功罪についてもお触れいただきました。

それでは続きまして一般視聴者の立場から、緒方先生にご報告をお願いいたします。

#### ○緒方（熊本県菊池市立菊之池小学校長）

私自身がここに出てきたのが、自分自身でわからないのですが、一般視聴者という立場からみた場合に、どうしても何かあら探してみたいな形になってきますが、実は、まだ今年の今頃までは県の社会教育課のほうにいましたので、そちらのほうの感覚がまだ抜けずにおります。

生涯学習をどのようにとらえるかということから、いわずもがなでございますが申し上げますならば、いわゆる社会教育行政が、それにどういうふうに対応していくかといえば、住民の方々に対して、いつでも、どこでも、だれでも学べるような学習の機会を提供していくというのが基本になると思います。また、そういう学習の機会に対する情報を提供していく。そういう立場になると思いますが、その場合でも、その情報を選択するのは住民であるし、視聴者であります。その公開放送を考えた場合に、チャンネル権はどっちにあるのかとなりますと視聴者のほうにある。45分なり40分なり、とにかくこれが楽しみだ、この時間だけはほかの用件があってもテレビを見たいということになるためにはどうするのか、ということが視聴者の立場ということになると思いますが、そういうことから考えていった場合に、一つの恥ずかしい例ですが、昨年4月辞令をもらって小さな小学校にいったわけですが、そこで一番困ったのは入学式のときに何を話すかということなんです。保育園、幼稚園からきた子供たちに、入学という大事な意義を知らしめるための話をするのに、何回原稿を書き直したかわかりませんが、担任に見せてみますと、「これは私もわからん、こんなのを保育園からきたばかりの子供に何がわかりますか」というわけです。言わんとすることは同じでも聞くほうにわかるようなことでない限り何にもならないということをしみじみと体験しました。今でもいろいろな集会のときに、子供たちに話すときに、1年から6年生までおるのに、どこに焦点を当てて話したらいいのか。1年生に話していった場合に「あのね」と話していっていると6年生は聞こうとしません。5～6年、上学年を対象にした言い方をしますと1年生は2分ともちません。あっちこっちがじゃがじゃになる。そのへんをテレビというのは考えていかなければならない点がありはしないかという気がする

わけです。おれの専門枠内だからこれしか放送しない。聞くほうは、その講師の先生が何の専門かわからないわけであって、ここが知りたいという欲望をもっておるのに、そこにはふれられないいらだちというのもあるわけで、そのあたりをテーマの設定の段階から、視聴者をどのようにとらえてテーマを設定するのか。中身を組み立てるのに大学という非常に高度な研究専門機関がどこまで開かれていくのか。その場合に視聴者というものをどれほどとらえておるのか、ということが非常に問題になるのではないかと思います。だからそのあたりで、ここを知らせたいという教えるほうはそこに焦点を絞っていかれるわけですが、実は視聴者のほうはここが知りたいというのとギャップがあるわけです。そこがこれからの放送を作成していく場合の非常に大きな問題ではなからうかという気がするわけだし、ターゲットをどこに絞るかというのはきのうのお話にもありましたように永遠の課題だ。ただ永遠の課題というだけでいいのかどうか。生涯学習のなかで一番学習要求の高い人たちというのは高齢者の方々です。そうすると、高齢者の方々に絞った内容をもってくれば、大学内で使おうとした場合にどうなのかということで非常に困るわけだし、そのあたりの制作の仕方に対しては非常に無理がくるのではなからうかと思うのですが、放送メディアといいますか、テレビの特性を考えたときに、熊本県をいえば熊本県の隅々まで、各家庭の中に映像として入っていく。そうすると、どうしても大学のほうに注文申し上げるような形になるわけですが、おれのところではこれだけの研究、体系的な、学問的な、学術的なものを学内でやっておったのを分かち与えてやるというような対応では絶対ないわけですが、何となくそのように受けとれる部分があります。どうしても都市型、熊本でいえば熊本市の住民が対象になるような中身になってはいないだろうか。社会教育行政からいえば熊本市は熊本県の中で一番学習機会の多いところ、農山村にいけばいくほどそういう学習の機会は全くないというところもありますし、強いて言えばテレビが一番ということになります。そこに流れてくる映像をもとにしながら学習を進めていこうとする人たちにとって、本当にその地域のいろいろな問題がかみ合ってきているのかなあという気がするわけなんです。だから、そういったところにも手の届くといいますか、大学でもっておられる素晴らしいものを分かち与えていただけるような中身をプログラムの中に織り込んでいただけたら非常にありがたいという気がいたします。

視聴者のほうとしては、こういう素晴らしいものがあることをなかなか知りません。いろいろな形で広報はなさっておりますけれども、一人ひとりの住民となりますとほとんど行き渡っていないわけです。2～3年前から熊大のほうとしては県・市の社会教育行政の担当者あたりを一緒に委員の中に入れてやっておられますし、そのへの連携はうまくいっておりますが、個々の視聴者にそれがはっきりいっているかという、まだまだそこがいていません。その広報のあり方、61年度のアンケートを調べてみますと、一番多く知ったのは市町村の広報紙からなんです。テレビ・ラジオあたりでいろいろ宣伝されても、何をもって学習しようと思ったかと言えば、市町村の広報紙に載せたのが一番だった。それで市町村の広報紙をフルに活用することも大事なのですが、その担当者との連携も今後考えていかないと、その大学の意図するところを受け手側の住民に対してもっていくためには、中継ぎの市町村の担当者が十分理解をするということが必要になってくる。そういう機会を設けていかなければならないのではないかという気がしたわけです。

今後の活用を考えていった場合に、1回きりということと、もう一つは社会教育の場面からみますと1人で学習するというのは何となく寒々しい感じがしますし、みんなが集まって一つの教材をとおしながらいろいろと学習をしていく。それをとおしながら集まってきた人たちの連帯感も加えていく。あるいは涵養していく。醸成していくというひとつのねらいがあります。そういう場を設定するのは、先ほどもちょっと出ておりましたが地方の公民館活動の中にそういったものが出てきます。その公民館活動のなかにそういったものを取り入れていきますと、来年はいつから始まるのだろうかという期待を持ってくるし、視聴の意欲も違ってくると思います。そういう場面に使えるためには、一過性といえますか、そうではなくて、著作権の問題があると思いますが、ビデオをふんだんに使えるような場が出てきたならばという気がしてなりません。

時間がまいりましたので、このくらいにしておきたいと思います。失礼いたしました。

#### ○司会

ありがとうございました。

社会教育のご経験を踏まえて、生涯学習の立場から、生涯学習と大学教育とをどこで結びつけるか。学ぶ側と教える側との接点をどこに求めるかという、まさしくきょうのシンポジュームのテーマに切り込んでいただきました。いろいろ問題点もご指摘いただきましたので、後ほどご討議いただきたいと思います。

続きまして大塚先生にご報告をお願いします。

#### ○大塚（放送開発センター）

私は、セニター調査を担当しましたので、その調査の概要についてご報告いたしたいと思います。

アンケート調査は、お手元に配付されております藤色の調査用紙が、調査の原票であります。調査の基本的な細かい資料に関しましては、きょうの第2セッションのおしまいのほうに細かく載っておりますのでご参照ください。非常に細かくなっておりますので、必要に応じて辞書的に引いていただければと思います。ここではその結果をかいつまみましてOHPを利用して説明させていただきたいと思います。

まず、グループの特徴についてご説明いたします。番組につきましては先ほどご覧いただきました「野菜は文化財」と「野菜の形態学」、それを熊本の一般視聴者と熊本大学の学生の3つのグループに視聴していただいております。それぞれの番組は独立に別々のグループで視聴していただきましたので、全部で2×3の6つのグループから構成されております。

人数の割合は、一般視聴者は大体50名弱、熊本大学の学生はかなり多くて150名から200名、放送大学の学生は30名前後という形になっております。

グループの属性的な特徴を申しますと、一般視聴者は赤の部分です。女性が約75%、一般視聴者の年齢的な構成からいきますと大体40歳前後が多い。つまり主婦層が大半を占めているということになります。学歴は大体高卒の方が多い。そういう意味で中年から高年にかけての主婦の方を一般視聴者と思えば浮かべていただければ、大体のところ当たっているのではないかと思います。熊本大学の学生グループは逆に緑の部分が多くなりまして、56%ぐらいを男性が占めております。

学部は教養学部、医学部の2つの学部が若干多いですが、かなり万遍なく7つの学部からサンプルが得られておりますので、まずは大学の学生の代表的なサンプルということが考えられるのではないかと思います。それから放送大学の学生は、赤の部分、女性の割合が多く、一般視聴者に比べて年齢的には若干低くなっておりますが、ほとんど一般視聴者と変わらないような中年の主婦の方を想像していただければよろしいかと思います。ただし放送大学の学生の方は、卒業を目指すということで放送大学に所属している点が一般視聴者の中年の主婦層とは違っている唯一の点とお考えいただければよろしいかと思います。

アンケート調査では、属性のほかに幾つか学習の目的なども聞いておりますので、特に一般視聴者、熊本大学の学生、放送大学の学生に関しましてもう一つ詳しく見てみますとこういったグラフが描けます。これがどういうことかといいますと、学習の目的に関しまして、大学の卒業資格を得たいとか、専門的な知識を得たいという、それを卒業専門指向ということでまとめましたが、これがそういう関係に関する指標になっております。次の教養指向と申しますのは、専門的な知識に対して一般的な教養が得られればよいという指向性になっております。それから勉学指向といいますのは、要するに勉強することそのものが好きだという勉強そのものに関する指向性という指標になっております。それから学習手段の利用といいますのは、たとえば図書でありますとか、教育用の番組であるとか、そういうものをどれぐらい普段利用するかという利用頻度みたいなものに関する指標になっております。

最後に、きょうのテーマになっております、野菜に関する関心度の総合的な指標ということになっておりますが、これを見てみますと、赤が一般視聴者、緑が放送大学の学生、橙で描きましたのが熊本大学の学生ですが、この緑と赤、一般視聴者と放送大学の学生に関しましては、教養指向、勉学指向、学習手段利用、野菜の関心というのはほとんど重なっております。違っておりますのは卒業専門指向ということで、放送大学の学生が高くなっております。この3つのグループで特徴的なのは熊本大学の学生でありまして、卒業とか専門指向性というのはかなり高いですが、一般教養指向、勉学指向、学習手段の利用、野菜への関心度などはほかの2つのグループより低くなっているといったような特徴がうかがえます。

調査の項目をどういう形で設定したかということですが、きょうのシンポジウムのテーマが「生涯学習と大学教育の接点」ということでありますので、生涯学習、大学教育それぞれどういう特徴があるかということのを少しまとめてみますとこんなことになるのではないかと思います。

先程からお話が出ておりますように、生涯学習と申しますのは、実際に地域の実生活に役に立つような実用性、それから一般的な教養が向上するという。それから自分自身も持っている知的好奇心を満足するような観点、さらにそういう勉強することに関する動機づけみたいなもの、こういう条件が満たされているというのが生涯学習の一つの特徴になっているだろうということを考えました。

一方、大学教育では、これも先程話がありましたが、専門的な知識を深めていく。ただ深めていくのではなくて一定の理論的な体系が必要になってくる、といったことが考えられると思います。

そういう意味では、生涯学習と大学教育の2つの観点を両方満たすような教材づくりは多少ギャップが出てくるのは当然と思いますが、もちろん両者はお互いに相互作用をするような部分もありまし

て、理論的に深まれば実用性も高まるし、教養も高まる。そういうことを通じて理論的にもまとめられていくという循環が考えられます。そういう循環ができるということのためには、学習が継続されていくということが重要な観点として一つあると思います。特に成人学習の基本的な部分として、最近心理学でもよく言われていることですが、自己学習能力という観点が言われています。要するに、教授、学習という場面でなくて、自ら学習していくという能力は、こういう生涯学習と大学教育との接点を求めるときに、その接点として一つ重要なキーポイントになるのではないかと考えられるわけです。自己学習能力といいますと、もう少し砕いて言えば、自分が学習していることに対して、もっといろいろなことを知りたいという学習意欲の面でありますとか、具体的にそれを学習していくためにはどういう方法が必要なのかという学習方法、そういうことに関する学習、あるいは意欲、こういうものが重要になってくるのではないかと考えまして、その調査原票を見ていただければわかりますが、25ほどの項目、これは体系的ではなく思いつきのに選びましたが、ピックアップしてみたわけです。

調査の結果ですが、一言でいってしまいますと、番組の差はあまりなかった。出てきたのは3つのグループの差であったということですが、番組の差はなかったということですが、2つの番組とも番組そのものに対する好感度は、非常に高かったわけです。たとえば2つの番組とも、これが調査の1段階から4段階まで、平均した値をグラフ化したものですが、要するに2.5といますのは中間です。1にいくほど、たとえば教養番組として適切だという相関になります。理解しやすいということが当てはまるということになります。いずれもここにあげたような項目は2.5よりも高い値を示しております。細かい相関分析などの結果は、こういう項目は大体相関の高い項目でありましたけれども、それぞれの番組とも理解しやすく興味もかなり高い。映像の利用も適切に行われており、新しい発見もかなりみられた。教養番組としてはかなり適切であろう。番組の全体的な満足度も高いという傾向がうかがわれます。ただ、グループ差として出てきますのは一般視聴者と放送大学の学生ですが、これがかなり高いレベルにあり、熊本大学の学生のレベルだけがやや下がっている。こういうようなグループ差が一貫してみられたわけです。

こういう高い項目に比べて、若干低い結果が得られた項目もございます。どういう点かといいますと、これが先ほどの項目であります。それに対して若干低く、2.5に近いレベルの項目として出てきましたのが、要するに視聴者のほうが考えるための工夫があるか。それからもっと知りたい点があるかどうか。次の学習へのきっかけがつかめたかどうか。そういう点が若干低い結果となって出てきております。普通、番組を評価するときに重要なポイントとして、興味深いおもしろさとか、わかるかわからないか — わかるかわからないかというのはかなりクリティカルなポイントで、わかるという一定のレベルが得られた場合に興味深いかどうかという、番組全体に対する満足度を決めるという傾向がありますけれども、生涯学習に関する先程の自己学習能力、学習への継続みたいなものに関する項目が若干低くなっているというのがやや気になる点として残されています。

それに対して、番組差が出た項目もございまして、専門用語が必要以上に多く使われていた。これは「野菜の形態学」のほうがやや多く使われているという結果になっています。緑が「野菜の形態学」、



赤が「文化財」のほうですが、やはり番組制作の意図がこのへんに表れております。先ほどもお話が出ておりましたけれども、内容が多過ぎるのではないかという点も「形態学」のほうが多いという結果が出ております。

大学の講義らしさ。これも「形態学」のほうで高い値を示しています。ただ注意していただきたいのは、これは番組差でありまして、専門用語が必要以上に使われていたという評価は2.5より下ですので、それほど必要以上に多いということはないということが言えると思いますけれども、2つの番組では差があったということです。

こういう意味で、制作上の意図というのはモニターへの番組に関する印象に対して明確に出てきたということです。それにもかかわらず2つの番組の、先ほど出したような部分の値 — 理解のしやすさであるとか、興味深さというのは、こういう項目に比べて差が小さいということになっております。そういう意味では生涯学習と大学教育の接点を求めるという意図でつくられた番組の意図がある程度成功しているのではないかといえると思います。

さらにこういった問題点が「形態学」が多いということにもかかわらず、「新しい発見」というのは「形態学」が若干多くなっておりますし、このへんの逆転現象は多少意味がある部分かもしれません。

そういった形で集団としての傾向はわかりますが、あと幾つか調査を、もう少し細かく分析したところで気付かれる点について融れておきたいと思います。

まず最初に、今まで申し上げましたのは調査の全体的な集団の傾向ということですが、実は、番組に対する感想を自由に書いていただく部分がありまして、その主な意見に関しましては、きょうお手元に配付されております資料にたくさん出しておきましたけれども、そういう意見を見ますと、かなり多様な個人差があるということです。たとえば「文化財」のほうはアナウンサーと先生の対話形式になっております。「形態学」のほうは講師1人の講義形態となっておりますけれども、一つの番組を見た視聴者が対話形式のほうが柔らかくていいという意見と、むしろアナウンサーとの対話はいらなくて講師1人の説明のほうがいいというような意見、そのへんがかなりはっきり分かれています。それから大学教育という意味で、大学の教養科目として相応しいという意見もあれば、これは中高校生のための啓発番組なら適当だという意見の人もいます。たとえば例が盛り沢山でまとめきれない人もいます。一方では逆に例がたくさんあってわかりやすかったという人もいます。そのように一個一個の意見をくみとっていくとどうしてもないくらい多様な個人差があるということです。そのなかで一貫した個人差ということでまとめるならば、重要な点は今までご説明しました表の中では割愛したのですが、先ほどの評価のなかには重要な性差があるということです。性差と申しますのは、ここで扱いました「野菜」というテーマから、やはり女性のほうが野菜への関心度が高いわけです。野菜への関心度と番組評価との相関というのはかなり高くなっております。熊本大学の学生の評価が低いという結果が出ておりましたが、野菜への関心度があるものは非常に高い評価をしているということがあります。

今までご説明しました結果と申しますのは、見る側のほうの関心とか態度と非常に密接な関係があ

るということです。そういう形で考えてまいりますと、どういう番組でも、それでいいという人と悪い人がいるということは、それぞれの好みに応じて多様な視聴覚ソフトが必要になってくるのではないかと。この点に関しましては放送大学の調査を私が担当しております、ビデオの保有率を見ますと、放送大学の学生はいま8割の学生がビデオを保有しております。先ほど著作権の問題があるという話題も出ておりましたけれども、これからはそういう視聴覚のソフトというのが従来の図書と同じような意味合いが出てくるのではないかという気がいたします。そういう意味で、もちろん番組作成上の幾つかのクリティカルなポイントがあると思われましても、多種多様なソフトができて、それを講師の側、あるいは学習者が自ら選んでいけるという情勢になることが一つ重要なことではないかと思われまします。

そのうえで生涯教育と大学教育の接点ということで考えてみますと、いみじくも最初に今江先生からも「生涯教育、大学教育とあまり区別せずに、それをいかに使うかが重要だ」というご意見が出されましたけれども、私もその点に関しましては全く同様な感じが、この調査をして抱いたわけがあります。たとえば先程「次の学習へのきっかけがない」とか、やや低い結果が出ておりましたけれども、それは今江先生が、たとえば「水と人間」の公開講座でおやりになられたような形で補足的に補うことができますし、その目的、場所に応じた利用法が今後むしろこういうテーマでは重要なものになってくるのではないかという感じがいたします。もちろんここではわずか2本の番組なので、もっとクリティカルな部分が出るような調査も組めたかと思われましても、わずかなデータから私が感じたことをご報告させていただきました。

以上です。

#### ○司会

どうもありがとうございました。

それではフロアーからご意見をいただくこととなりますが、実は大阪大学の水越先生にも、いろいろこの両番組についてご検討をいただいたと聞いておりますので、そこらあたりから始めたいと思います。よろしくお願いいたします。

#### ○水越（大阪大学）

大阪大学の水越でございます。

最初にこういう2つの比較の番組をつくられて、検討する材料を提供していただいたということで、熊本大学のこういう試みに対して心から敬意を表したいと思われまします。言うはやさしく実際にはなかなかできないことではあります、映像で一つの概念なり知識を伝えるときに、どういう伝え方をしたら一番いいのかという答えは決まっておられませんので、二色のものを出していただいた。このことに対して大変敬意を表するものでございます。同時に、こういうことをやがて大阪大学に回ってきたときにせにゃいかんということになると、困ったことになったと、隣の毎日放送の小林さんと頭を抱えておるわけでございます。

まず放送教育開発センターのほうから、事前に少し検討をしてもらいたいというご依頼がございまして、私のところへ大塚先生がいま分析なさったようなデータとか映像資料が届きました。私もちよ

っと外へ出張しておりまして、月曜日に初めてばっと見たわけですが、そこで感じたことを簡単に申し上げてみたいと思います。

まず最初に、送っていただいたデータの、先ほど大塚先生がご説明なされたものをざっと見まして、一番感じたことは、熊本の一般視聴者と放送大学の学生との反応がほとんど同じであるのに対して、熊本大学の学生のスコアがかなり低いということでもあります。いま大塚先生は平均値でお示しになりましたからあまり違いが出てないと思いますけれども、お手元の資料の後ろにずっと数字が出てきておりますが、その一番上の「同意」というところを見ていただきますと、かなりの差が出ておるはずでございます。たとえばいい悪いは別として、かなり否定的な意見が熊本大学の学生の意見が出ております。たとえば「番組の進行が単純であった」という言い方に対して一般の人が1.1、放送大学が4.8であるのに対して熊本大学の学生は17.1とっているし、「わかりやすい」というのは一般の人は7.2に対して熊本の学生は43.6というふうにしてかなり差があるということにまず気がつきました。しかし何もかも否定的かというところではございませんで、たとえば「大学の講義としても適当か」というとほとんど30%、20%台で3つ同じであるとか、「内容が重要であって講師の技術や番組の構成は問題とならないか」という18ページの最後のところでは47.8、44.8、41.3いずれも不賛成でございます。つまり内容がいくらよくても構成の技術とか、講師や番組の構成によっては非常に出来映えが違ってくるという意見では全く三者の意見が変わっていない。ということになると、熊本大学の学生はやはり正確にジャッジをしておる。決して冷やかashiではない。ただ、かなり両者に比べて全体にネガティブな意見が多い。こういうことを感じまして、なぜかな、というふうに思っておりました。いま大塚先生が2枚目に示していただいた五角形のものを見まして、なるほど属性のところをもう少し詳しく見るべきだったと思いますが、属性はご覧のように一般の方と放送大学の方もほとんど五角形の一つを除いて一致しておるのに対して、熊本大学の学生の視点はだいぶ違います。そういうこともあろうかと思いました。

そこで、来る前日に大阪大学の私の研究室で、特に放送教育とか映像論、教育工学の学生のなかでメディア論なんかをやっている大学院の学生と、学部の3回生の学生を何人か調達いたしまして、この番組をいっぺん見てみろとって私も見ました。45分の番組を2つ90分ぶっ続けに見せまして、あとフリーのトークングをやらせました。数が少ないので、大塚先生がお示しになったような質問肢についてのチェックはせずに自由にしゃべらせました。その結果、結論からいえば熊本大学の学生の反応と阪大のメディアとか放送を専門にしている学生の反応が驚くほど一致しておることが事実でございます。

そこで結論から言いますと、かれらが評価したといいますか、一番強く感じたのは、この両番組に意外性がある。たとえば最初の「野菜は文化財」のほうは、原産地がこんなほうだとは思わなかったという意外性でございます。それに対してあとの「野菜の形態学」のほうは根・茎・葉というものが、自分たちが思ってもいなかったような大根とかワサビの例を見せられて、そういう意外性というものが実に興味を引きつけたことを言っております。これはお手元のシンポジウムのセッションの自由記述をお書きになったところに、随所に「意外性」と一般視聴者も、熊本大学の学生さんも書いてお

りますので、そこはぼくらとしては注目すべきところではなかったか。この映像をとおして今江先生がお出しになった一つの訴えるところであろうと思います。

もう一つは、学生の中には、今江先生が最初に申されましたが、1本目の「野菜は文化財」の番組というのは、植物の進化と人間との関わりということを意識したつくり方である。2番目のは全く大学の講義を、活字を映像に変えただけの番組だ。こういうことを私の学生は申しました。言い方は極端かもしれませんがそういう感じで、2番目のもののなかには「十分な意図がそれほど読みとれない」という意見が多かったです。

「意外性」ともう一つペアになる否定的な意見としては、「余りにも盛りだくさんである」。この番組の内容にこれだけのものを45分に打ち込んだのでは、見ているものとはとても理解できない。たとえばアンケートの19ページあたりにも「内容が豊富過ぎて2～3回に分けてはどうか」という意見が出ておりますし、次の20ページにも「内容が豊富過ぎて全部覚えられない」とかいうことが出ておりましたが、やはり一つの番組の中に盛り込むべきポイントを3つ4つとおいた場合には当然拡散してわからないということがいえるのではないかと思います。

最後に、この番組2つ見せていただきまして、たとえば「野菜は文化財」の場合には、大根畑へ今江先生がお出かけになって、そして実際に野菜としての大根を手になさる。そして「とうが立ったということが実はとても植物にとっては大事だ」とおっしゃって、それから海岸へお行きになって野生の大根をお抜きになる。ここにいわば先生の真価と、そして人間が手を加えたということの山場になるシーンがあそこにあったのではないかと思います。もうちょっと言えば、「文化財」としての野菜のところは、あの「大根」というところをもっとぐんとウェットをかけて出す必要がなかったらうか、あそこをもっと強調してもらおうとめりはりがついたのでないか。

それに対してあとの「野菜の形態学」のほうは、「大学の講義により近いものだ」ということは小林先生も先ほどおっしゃいましたが、そのなかで意外性というのがあって、これは植物学の専攻の学生にとっては当たり前のことではしょうが、全くしろうとの私どもにとっては葉と根と茎のところは、思ってもみなかったということが出てくるわけです。その場合に、たとえば先生が何か一つ、キャベツでもいいし、タマネギでもいいし、芋でもいいですが、何か一つきちんと包丁で割って説明なさる。そこでとめて、あとはむしろ、ここで「クイズ形式はできなかったか」というアンケート調査の結果が出ていますが、クイズではないにしても、それと同じようなものを視聴者に見つけさせるというやり方はできなかったか。典型的な事例を一つだして、それを適用できる範囲がどこまであるかという演繹的発見と、われわれの専門のことばでいいですが、帰納的発見ではなくて演繹的な発見として一つぽんと事例を出して、それがどこまで当てはまるかとやって、ここまできるともう当てはまらない。もう一つ別の説明が必要だというやり方で講義をするのは、決して大学の講義になじまないのではなくて、これも教育学の基本的なやり方でありまして、全部割って全部説明したのでは、教育の方法を二つに割りますと、片方はディスカバリー、片方はインドクトリネーションでありますと、むしろ全部割って全部説明すると、せっかくのご意図がインドクトリネーションのほうに近づいて、それだけ学習者の主体的な参加が遅れるというのは常道でございますから、おやりになるならば一つ典型例

を見せて、あとの芋については視聴者に発見させる方法をとっていかれるという手法等をお使いになると大変よかったのではないかと思います。

いずれにしても、こういう材料を大担にお出しいただいたということに対しましては心から敬意を表します。ちょっと言い過ぎな点があったかもわかりませんが、ご容赦をいただきたいと思いません。

○司会

ありがとうございました。

今江先生からも後ほどご発言をいただきたいと思いますが、実は、放送大学の宮崎先生がご出席だと聞きましたので、同じく専門の立場からご発言をいただければ大変ありがたいと思います。

○宮崎（放送大学）

放送大学の宮崎です。

私、以前に「野菜は文化財」のほうはちょっと拝見させていただきました。「野菜の形態学」のほうはきょう初めて拝見いたしました。どちらも今江先生大変お上手にお話をなさっておられますので、私の放送大学の番組を思いますがと忸怩たるものがありますけれども、先生のご講義はかなり高度に教育の目的を果たしておられるように思います。

若干疑問に思いますのは、「文化財」のほうはすでに完成しておりました番組ですけれども、それに対してきょうのシンポジウムに使用することを主たる目的にされまして「形態学」のほうをおつくりになったということですが、それでも、「文化財」と「形態学」2本の比較がしにくいという感じがします。同じように「野菜は文化財」的な取り扱いでもう1本別の見方で、別の方につくっていただくと、人が変わり扱い方が変わるとどう変わるかという比較がしやすいと思いますけれども、その点、素材がちょっと違いますので、どちらがどうという比較は私はしにくかったと思います。

大学の公開講座という番組には、放送大学の番組とは全く違って目的があると思いますので、大学の公開講座という理解が私はあまりございませんけれども、地域における大学の講座と考えますと、熊本大学の公開講座であれば、熊本地域に何か関係のあることが含まれていたほうがよろしいのではないかという感じを一つ持ちました。「野菜は文化財」の場合に特に思ったわけです。「文化財」の場合に熊本地域の野菜の故事来歴に世界の野菜の発生の歴史がどのようにつながってきているのかという視点がちょっと入っていたほうがよかったという感じがいたしました。

○司会

ありがとうございました。

どうぞご自由にご発言いただきたいと思います。

○光永（熊本放送）

先ほど小林先生のほうからも印刷教材のお話が出てまいりました。実は、大学公開講座でも印刷教材をおつくりになるわけですが、きのうのご報告のなかにも、信州大学でございましたか、印刷教材がベストセラーになったというお話がございました。私どものほうの番組でも大学のほうでおつくりいただいた印刷教材を使わせていただいておりますが、ただ、これは一般に配付するものではないもの

でございますから、ほとんどの視聴者が印刷教材を持たずに視聴しているという状況でございます。印刷教材の発行の手立てみたいなものもこれから先工夫していかなければいけないと思いますが、そのあたりで印刷教材があるのとないのとではずいぶん理解の仕方が違う、また番組のつくり方も違ってくるのではないかという気がいたします。そのあたりの実情を少しお聞かせいただければありがたいのでございますけれども。

#### ○天城（放送教育開発センター所長）

放送による教育の場合に、日本ではNHKの学校放送が50年の歴史をもっている。これが一つの定着した姿です。これはご存知のとおり「学習指導要領」があり、それに基づいて学校の教師の指導のもとにやるというはっきりした教材です。放送大学の場合には、登録した学生ではじめから意思をはっきり持った学生、場合によれば4年間やって学士号をとろうという、これもかなりはっきりした学生ですけれども、要するに遠隔教育ですから、一番大きな問題は個人学習です。ところが公開講座とか一般の放送の教養講座というのは、まさに不特定多数の人々を対象にしているし、場合によれば公民館等による集団学習もあるかもしれませんけれども、これもばらばらである。そういう意味で、同じメディアを使っても対象によって、目的によって学習者の意欲というか、集団によってかなり違うと思います。少なくとも知的学習をやるためには、小林先生もおっしゃっておられましたけれども、世界的例をみましても絶対に印刷教材がなければ学問的な体系の知識は得られません。ディレクターの立場からいきますと、一般の番組というのは映像で語らなければいけない。映像で済まさなければいけないので、テキストを読んでくださいとか、ほかのものを読んで始めてわかりますというのでは放送にならない。そのかわり、あんな番組をつくったとか、あるいはよかったとか、責任は全部ディレクターにかかってくる。ところが放送大学のような場合には必ずしもそうではなくて、むしろ主任講師のほうに多く批判も賞賛もかかってくる。そのへんの違いは非常にある。私は、今江先生がおっしゃったことは基本的に正しいと思うので、映像はやはり映像で、ディレクターは、内容はどうあれ映像で語ろうとするわけですから、それをどう使うかということは学習者の立場と置かれた位置によるので、先ほどおっしゃったように大学の先生が学内利用をする場合にどう使うかによって、同じ番組でも非常に違ってくる。学校放送の場合には教師の指導の前後に挟むという前提に立っていますからはっきりしている。そのへんのところを考えまないと、一般向けだからこのへんでよかろうとか、あるいは大学公開講座だから少し肩肘を張らなければいけないとか、あまりそういう前提は考えぬほうがいいのではないかと考えています。ただ、一番難しいのは、少なくとも大学公開講座のような、ある程度学問的なものを裏付けしたものを一般向けに教養番組として放送で流そうというときが一番難しい。生涯学習生涯学習といいますがそこが一番大きいと思います。生涯学習だからマスメディアも大いに協力しろ、特に電波のもっている今日の有用性を考えると、もっと使え使えというんですけれども、この使い方は娯楽番組とかなり違う。ニュースともかなり違うし、そこに一つ工夫を加えない限りは大変難しいと思います。

さっき緒方先生からお話があったように、同じ小学校でも1年生と6年生は話し方が違う、苦心されているというお話ですけれども、それも全体でして、実は、この公開講座の番組のときにも、大学

の放送だから一体どこに焦点を置くのだ。少なくとも大学といわれる以上はという考え方を皆さん持っておられる。ところが相手は一体誰なんだろう、というのは誰もわからない。

最近あまり議論がございせんが、過去10年間のセミナーで、いつでも、シンポジウムで誰が対象かわからないんでどこに焦点をおいていいかわからないという議論が絶えず出てきておりました。個人のことを申し上げて恐縮ですけれども、大谷先生が信州で始めるときに割り切りまして、大学公開講座は紅白歌合戦じゃありませんよ、老若男女全部聞かなければだめだと考えていたらできっこない。マニアが迫ればいいんですよ。むしろ番組をちゃんとつくりなさい。あの先生はマーケティングの先生だからマニアはいくらでも探してくるよ、とやったわけです。どこかすべてが同じだと考えたり、こうやるべきだということのほか、映像というのは映像のもつ問題があるし、私はたまたま全放連という幼稚園から高等学校までの学校放送の関係の団体をお手伝いしているのですけれども、放送大学の問題とかこの問題をやっていまして、学校放送との違いがよくわかります。そういうことをだれということはないのですが、ちょっとコメントとして申し上げておきたいと思います。

○司会

ありがとうございました。

○本田（北海道大学）

ただいまの天城所長のお話と重なるようなところがあるかもしれませんが、実は、今回2日間出席しております、いろいろ考え読んできたのですけれども、問題の究極にあるのは、ことばは悪いかもしせんけれども、教育における影響の問題と申しますか、どういうふうに視聴者を、あるいは学生を激発するか。そのへんに何かあるのではないかという感じが日ごろ大学で教鞭をとりながら考えていることと折り重なってきた次第です。

ただいま事例が一つ引かれましたけれども、要するにマニアが集まればいいという、これは大変妙を得た表現でありまして、たとえばちょっときざったらしい例を引きますと、エドガー・アラン・ポーというアメリカの詩人がいた。これの生んだ種がふわふわと海を渡ってヨーロッパに落ちる。たまさかパリに住んでいたボードレールのふところの中で消化されて、ほかの連中にはあまり消化されなかった。しかしながらボードレールのなかで消化されたエドガー・アラン・ポーの詩集は、やがてジャン・モレアスとかいうマラルメあたりで象徴主義に体系化され、現代詩につながっていく。要するに教育というのは、先ほどのことばではないですけれども、与えるものと受けるものの関係ではないだろうと思います。つまり、常に探究している人間と、常に模索している人間、これは探究者と探究者といってもいいと思いますが、俗に言えば何かに関心をもっているマニアとマニアのぶつかりあい。これでいいと思います。そして50人の学生がいれば50人の学生に影響力を提供することはまず不可能だろう。現代のように非常に変形してきた大学の中にありまして、50人の学生全部に自分の言おうとしていることを伝達することはできない。ましていわんや先ほどの大塚先生のお話ではないですけれども、個人差たるや微妙に、激烈に偏差値がある。だから $\alpha$ なら $\alpha$ という事柄を自分は提示したつもりなのにそれを $\alpha'$ としてある学生は受けとめるだろうし、ある学生は $\beta$ と受けとめるかもしれない。こういうことが多々教育にはあるだろうと思います。私が申し上げたいことを結局的に言う

ならば、あまりこだわらなくてもいいのではないか。もちろんいろいろな具体的な問題はあります。印刷教材の問題なども出ていましたが、印刷教材というもの、いわゆる活字文化がどこまで重要なのか、そうして映像化されたもの、あるいは電波によって送りこまれていくものがどれほど活字文化を克服できるのかどうか。このへんは今後に残されている課題でありまして、私は極めてこういう席に列して恥ずかしい、極めて傲慢な言い方かもしれませんが、後者の映像文化に対して、たぶん活字文化を牛耳り、コントロールする方向に向かうと思いますけれども、ほんとうの意味の深層的な心理学的な意味において、それが果たして深い意味での深層を映像的なものが、あるいは耳から入ってくるようなメディアが、活字文化と同じような、つまり対話をしながら、感じながら、考えながら、メモをしながら作業をしていくものとどういふような優劣の差があるか、ということは極めて問題ではないかと考えるわけです。

話はそれですが、この放送大学に関与して非常に興味を持つことの一つは、少なくともスクリーンなどに出かけたときの人々の非常に真面目な、むんむんとするような熱意のあるまなざしを感じとってくるわけで、そういうときに十分に補てんできなかつたものを、放送では十分に完成できなかつたことを補完すればいいという気持ちで進んでいるわけですが、いずれにしましてもきょうの提示されました実験的な方式としての「形態学」の問題と「文化財」の問題は、今江先生、熊本放送テレビ局の光永さんのお話もうかがって、このご努力は大変だったと敬意を表し、自分もそういうことをやったことがあるだけに頭の下がる思いですけれども、あまり拡散して、緒方先生でございましたか、いろいろ層が違う云々だというお話がありましたが、そういう問題ではないのではないかと。

きのう聞いてちょっと違和感があったのですが、タレント性云々の問題でもないのではないかと。むしろその人間の何を相手に伝達したいかという思い込み、これがどういう形で映像のうえに、あるいはラジオならラジオの技術的な方向のうえでのっかるか、そのテレビ局、あるいはラジオ局と、ものすごい思い入れのある教師との兼ね合い、弁証法といいますか、そのへんに作品の成否がかかるのではないかと私は個人的には考えております。

#### ○司会

どうもありがとうございました。

時間の制約がございますので、多くの方にご発言いただきたいと思っておりますので、なるべく簡単にご意見をうかがいたいと思っております。

#### ○丸山（新潟大学）

熊本大学の2本の番組を見せていただいて、いろいろ感想はありましたけれども、私は全く感じなかったことで非常に驚いた意見があったわけですね。つまり、盛り込み過ぎである。あの番組でまだ内容が盛り込み過ぎだといわれると、たとえばきのうの「ローレンツ変換の話」はどういうことになるのか、あるいは阪大で大変先端技術的なものをたくさんつくっておられますけれども、そういうものは、あれも盛り込み過ぎといわれたらどうやってつくったらいのかと考える。来年われわれは「脳の話」について何かつくらなければならないのですけれども、あれで盛り込み過ぎというのは、ほんとうにそういうことなのか、そうだったらどうやって「脳の話」はつくったらいのか全く迷ってし



まっておりますので、そこらへんのことをどなたかに教えていただきたいと思います。

#### ○司会

ここでパネリストにも若干ずつお話をいただきたいと思いますが、出ました内容では、学習者の違いに応じて放送教材も多様な活用の仕方があるということが一つ、また印刷教材と放送教材をどうのように考えていくかということにつながると思います。それから内容をどの程度盛るかという問題。その他いろいろ出ましたけれども、今江先生から3分程度ずつでお願いしたいと思います。

#### ○今江（熊本大学）

私自身もわけがわからないでばたばたやってつくったということですので、おっしゃると非常に困るわけです。ただ、「水と人間」をつくってから考えていたことは、映像というものが非常に強いものである。それを体系立てて位置づけをきちんとしてというのは映像ではできないので、文字か話でしなければいけない。この区別みたいなものを2年間「水と人間」を講義のなかに使っていて考えてきました。きのう新潟大学の方がおっしゃっていた、映像を使うと問題が出てきます。教養の地学の先生とも話したのですが、NHKの「地球大紀行」が放送になって教材に使っていました。そうすると、日本に地震が多い。それから太平洋プレートがこうというのをきれいな画で説明ができています。非常にわかりやすいがみんなそうだと思う。そのときにその先生が言っていたのです。「日本に地震が多いというのは事実であって、プレートがというのは仮説である。ところが仮説のうえに事実があるように映像でつくるとつくってしまうから非常に困る」という話。それは私たち先き物屋も似たことをよく思います。一つの事実を紹介するとそれで全部を錯覚する。また生き物に関しては目的論的な、こうこうするためにこうなった、のような形での話がすぐ出てくるし、ちゃんと説明してもそのように誤解されることが非常にあります。ただ、このごろ開き直りまして、人間というのは大体誤解力旺盛だと思ふことにしています。だから、誤解をするなら学生はいっぺん誤解をさせて、そして手間がかかるようだけれども、そのあとで誤解を解く方がよくわかるのではないか。「兎追いしかの山」というと、焼いて食うとおいしいと思っていた人間が、あれは追っかけた意味だと考え、「夕焼け小焼けの赤トンボ」は追っかけるのではなくて背中におんぶされるのだというふうに、あとでわかったときに一步深く入る。教育というのは案外そういうことの積み重ねではないかと考え、このごろあまり効率よくということばに非常にこだわっております。効率悪いほうがいい。そうしたら誤解を植えつけるほうがいいのなら、そんなことから言うと、私は盛り込み過ぎに関しては、中で言っていることはそんなに難しいことは言っていないつもりです。基本ルールを考えてというときに、例を野菜で引っ張りだして並べるということをしたのであれくらい。ただ根・茎・葉と、それから花・実の話を一緒にしたので、ひょっとしたら根・茎・葉だけでしたほうがよかったのかな、花・実を別にしたほうがよかったのかなとも思いますけれども、根・茎・葉と花と実を一緒にして植物のからだを考えましょうということをする、そうせんといかんし、根だけ3本つくれといわれたらつくれんことでもないと思います。私はきついからしませんけれども。そんなことでよくわからぬままに今しております。ただ、映像というものがほんとうに力があるものなんだということ、もう一つ私自身が分類という妙なことをやっていたものですから、人がすぐに誤解してくれます。「あ、植物の名前をつけるんです

ね。」だから夏休みの終りに宿題をもっていけばいい人だと考えます。博物館とだいぶかかわりをもっていました。博物館というのは捨てるにしのびない、そういう品物をしまっておくところである。もうこの道具も壊れたから博物館いきだという形で理解してくださる。自然保護のことを突っ込んでいますと「生き物を大切にすんですね」と、みな簡単にわかってくれます。簡単にわかっただけではどうにもならない部分があるので、私少ししつこいかもしれません。そんな意味で、意外性という形でだいぶおほめいただきましたけれど、意外よりも、この部分は常識のなかでわかってほしいということであれをつくりました。ただ、学生に話すときには学生がもういっぺんに説明できるようにわからせにゃいかんと思って、あとで補足の説明をします。ただ、こういう放送講座のような形の場合ではテキストなしにでも、答えだけはわかったというつながり方でわかればいいので、そのためには事例もたくさんあるほうがいいのではないかと、私は考えたわけです。

#### ○司会

印刷教材に関しては「野菜の形態学」のほうは作られておりません。そういうこともあって大学教育を意識しながら、しかも印刷教材なしで映像表現をするということでのご苦心があったと思いますけれども、そのあたりも含めて光永さんに補足していただければと思います。

#### ○光永（熊本放送）

印刷教材に関しては全く無いわけでした、最初から仕方がないことだとあきらめざるを得ないという状況でございました。ただ、基本的なことは、ことしのシリーズのなかで使わせていただきました印刷教材がありましたので、かなりの部分あれから借用することができるだろうという安易な気持ちは持っておりました。

一番皆さん方のご意見のなかで意外だったのは、今江先生の話と一緒にすけれども、盛り込み過ぎだというご意見でございますが、そうかなという気がいたしました。映像的にはあれだけ繰り返し物事の原理を繰り返して伝えていくというのは強烈な印象が残るわけでございますから、調査結果でも、あれが「意外だった」というのにつながってきているのではないかという気がいたします。

きのうの終わりのほうで杉先生のお話のなかにも「講師の数は複数がいいか、単数がいいか」というお話も出ておまして、そのとき考えたことは、複数とか単数とかいうことではなくして、番組の内容がどれだけ幅が広いのか、深みがあるのかというあたりが一番問題じゃないかという気がいたします。あまり人数が少なくても、内容が多過ぎれば過剰に感じるわけでございますし、ただ、今度の場合はあまり意識せずに、むしろああいうふうにならざるを得ないことによって印象を高めていきたいという手法をとった次第でございます。

むしろ、それよりも、先ほど大阪大学の先生のほうからご指摘を頂きました「もっと演繹法的なつくり方をしたらどうだったか」というお話、このへんは確かに参考になるご意見だという気がいたします。

それから、北大の本田先生のお話のなかにもありました「拡散することをおそれるよりも、何を伝えたいかということに意を払うべきだ」という、確かにそのとおりだと思います。これは民教協の井出プロデューサーと話をしていたわけですが、やはり先生方は何を自分は言いたいのかという、その1

点に絞れるということが、先ほどの講師の数と内容の問題とも共通性がありますが、何を伝えるかということをもっと最前提におくことが番組としての伝達効果を上げることだという気がいたします。

それから、「マニアに向けてだけ」という発想ですが、これに関しては私もちょっと異論がある、というのは視聴者というのは不特定多数でございますので、あまりマニアだけに向けてしまうと完全にそっぽを向かれてしまうことがあるわけで、そこまで割り切れはしませんけれども、こういうふうな教育番組という種類のものに関しては、一つ私も持論はあります。というのは、娯楽番組を見るのと同じ感覚で見えていただきたいくない。見る側にもある程度の覚悟を決めて見ていただきたいというのがあります。かといっておもしろくするとか、映像的に工夫をするとかを逃げようというわけではございません。もちろん番組としては当然完成されたものにならなければいけませんけれども、やはり娯楽番組とは違う。ある程度の覚悟を決めて見ていただく。そういう意味からするとマニアに見ていただければけっこうだというふうな意見にある程度近いのかもしれないけれども……。

#### ○司会

「内容が豊富過ぎる」というご意見のなかには、おそらく大学教育に使うことについてはいい番組であっても、逆に一般の視聴者に対してわかりやすいだろうか、ということが反面にあるのではないかと思います、そのへんについてはいかがでしょうか。

もう一点、「地域性を導入したらどうか」という宮崎先生のご指摘がありましたが、そのへん光永部長のほうから、もう少し付言していただければありがたいと思います。

#### ○光永（熊本放送）

そのあたりが先ほどの本田先生のお話と共通するところがあると思いますけれども、10放送しまして、そのうちの幾つまでぐらいを理解できたらそれで合格かということになるんじゃないかという気がしますが、その尺度というのはなかなか難しいものでして、10放送して10完全に理解していただくことがあればそれで非常にけっこうだと思いますが、それ以上に、5ぐらいしか理解できなくとも、それをきっかけにして、その事実に対する興味を持たれて、それ以外のときに教育的な機会を自分でつくっていただくということができれば、放送の功罪の功のうちに入るのではないかという気がします。かといって何度も申し上げますように、皆さん方にご理解いただくことの手段を怠けようというわけではないわけです。

それから、地域性の問題についてですが、実は今度の番組のなかでも「地域性が少ない」というご指摘があるのかもしれませんが、たとえば芥子蓮根の話が出てまいりまして、細川さんの九曜星の家紋と同じだという話が出てきたり、あのなかでお気付きかどうかしれませんが、ネギがたくさん出てまいりまして、ネギのなかにヒトモジというのがありますが、これは熊本の特産のネギみたいなもので細いネギですけども、そういうものも出ておりますので、何もその土地の名前を言ったり、地域の人たちを引っ張りだすという以外でも地域性は出せるのではないかという気がいたします。

#### ○司会

ありがとうございました。

今江先生、先ほど同じ講師、同じディレクターでつくった、これはやむを得なかったということも

ございますが、両番組を比較できるかということでのご質問ができましたので、これを含めてお願いします。

#### ○今江（熊本大学）

地域性のことですが、地域的なものも番組のあとのほうで取り上げています。ただ、あそこ品の品種の分化みたいなことに関してはちょうど適当な材料が番組をつくる時期にはなかった。いまは全国的に品種はどんどん統一されてきていますから、むしろ地域的なものよりも人間に合わせてみたいなことでの話で、あの場合にはあまり地域での特産みたいなものは入れずに、のほうの話が混乱しないんじゃないかと。ちょっと触ってどうこうするとき、とりかかりに親しみのもてる程度というか、こうでしか話がつながりませんでした。ただ、熊本の人間でもわかるのは、タカナという菜っ葉が、これは阿蘇のものと平地のものは全然違います。食べ方まで違います。そういう例としてはあとで入れたりしております。

それから、大学への利用ということでは、理学部の生物教室の植物の連中と相談して、毎年形態の講義のときに使おうという、いささか我田引水のことでも考えてつくりました。

それから「同じ人間で」、私自身もそう思います。私はお手伝いをすればいいくらいで引き受けたら、同じようなかっこうで、ディレクターも同じものですから、結局人間の発想は限られているという感じをしながら、それでもどうしたらという表現のもとに関しては、私の方はむしろ考えないでディレクターの方に表現方式だからお前の方で考えろと押しつけて、私は言いたいことだけ言っていたようで、その点はちょっとよくなかったかなと思います。できれば同じ材料を違う方が料理をして、違う目的でつくっていただけるのがいろいろな面での違いがはっきり出てよかったのではないかと思います。

#### ○司会

もちろん、いまおっしゃったような形で当初は企画しておりましたが、今江先生にご出演いただかないとどうしても出演者を確保できないということもございまして、今江先生から前にうかがったのですが、「野菜は文化財」の続編的な意味で「形態学」が、意識的ではないにしてもでき上がったのではないかという気がしないでもありません。

それでは、パネリストのほうの補足を打ち切りまして、大谷先生、先ほどからだいぶ話題にのぼりましたので、ちょっと発言できればと思います。

#### ○大谷（信州大学）

広い意味で教育方法論というのは私よくわからないので、ビジネスコンサル屋の目でいきますと、大学の公開講座でつくったのが「台所の科学」、どっちかというと柔らかいものです。熊本放送制作が固いもので「野菜の形態学」ですね。これはおもしろいといえばおもしろいのですが、得意・不得意からいくと熊本大学さんが「野菜の形態学」をつくるべきで、熊本放送さんが「台所の科学」をつくるのが一番得意・不得意からいくと素直な形じゃないかと思えます。ということは、もし「台所の科学」のお話の中身は非常におもしろくお聞きしたのですが、このテーマのつけ方は「台所」でいいのかなと、ぼくだったらクレームつけたいところです。それから「野菜は文化財」というのは、要す

るに多少見るほうに媚びたと思うのです。ここは毅然として ― うちでつくるとなったら、おそらく「野菜の形態学」に押させたと思う。逆にいうと「台所の科学」みたいなものをつくらせるならば、もっと大学の先生は企画だけで引っ込んで、あとは放送局にまかせておいたほうが、もっと音楽とリズムに合うような、大学の先生の野菜の大家は引っ込ませておいて、スターを少し出して、という形にすると、熊本大学はすごいセンスのいい大学だ、とこういうふうになるのじゃないかと思う。でもそれは意識してやられたかどうか。やっぱり「野菜の形態学」をやっているときの今江先生の顔は明らかに生き生きとしている。「台所の科学」は何か頼まれてものを教えてあげるといった感じが出ている。きのうの「ローレンツ変換の話」が仮に一つのモデルだと江藤先生ご用意したと思いますけれども、あれがモデルで100点満点だというならば、これはおそらく「台所の科学」をひっくり返さないといけないだろうと思います。

ただ、うちみたいな日本の地の果てみたいな大学でやる場合は、もう一つそこにビジネスの要素が加わりまして、「野菜の形態学」を大学でつくった。何人ついてきますかと問われます。これを見て得する人は何人いるのですかと当然考える。何千万か使っているわけですから、それでこれとなったら押す。うちの学校だと、ほんとうは「台所の科学」みたいなのをやりたいけれども、とてもじゃないけど教授の面子を見とったらとてもできそうなのがいませんから、ラジオの場合、たまたま知名度の高い人がいたものだからそれでよかったですけれども、とてもできませんから、そういう意味ではうちみたいな大学より熊本大学のほうが進んでいるけれども、きのうの「ローレンツ変換」を見たから、あれを見ると逆じゃないかという感じがする。何もあれがいいという一応の仮説が立つならば、聴取者にこびへつらうことはない。そのうえで放送会社のもっている制作上のいろいろなテクニックがあります。これは重要なところでもっと見てもらうためにどうすればいいか。最初から大学が突っ張らないで合わせたから放送会社さんが困ったのではないかという感じがします。

これは勝手な意見です。

#### ○司会

ありがとうございました。

大学教育の開放ということだと、聞いてもらわなければならないということで、むしろ学内の議論としてはもう少し固いものにしようという方向が大体は強いけれども、基本的には「台所の科学」の方向というのは、今の現状では公開講座を維持していくうえではやむを得ないと考えております。逆の意味だというのは、私もそういうように感想としてはもったのですが、いわば現状での大学側の悩みと制作側の悩みとがそれぞれ出て、制作側からいえば大学教育を忘れていませんよということであり、大学側からいわせれば一般視聴者を忘れてはいませんよということになっているのではないかという気がいたします。

中断いたしましたけれども、小林先生補足をお願いします。

#### ○小林（放送大学）

いろいろなことを今までの話で感じましたが、端的に新潟大の方が、あのようなつくり方で盛り込み過ぎというのだったらつくりようがないという趣旨の発言がございました。

私が申し上げたなかで、一番盛り込み過ぎということを感じたのは「形態学」のほうでして、視点が違うので盛り込み過ぎにならざるを得なかったのかと思いますが、1章とか2章とか全部撮ってやっても、やはり内容的に少なくとも2回分ぐらいに分ける内容をもっていたのではないかと。特にテレビですが、非常に速度の速い画像の写っていくのは、見る人にとっては非常に慌ただしいといえますか、理解をしていくのに追いつけないというのがありますので、そういう点からつくられた趣旨はわかりますけれども、放送の講義として見てもらうためにはもうちょっと時間をかけて、一つのところをじっくりやったほうが印象に残ると思ったわけです。

私、最初申し上げたところで少し違っているというか勘違いをしている点もございました。公開講座のほうも当然全員ではございませんが、スクーリング等もおやりになっている。そういう少数の方であろうと思いますが、これは放送教材と印刷教材をペアで勉強されていると思う。ただ非常にたくさんの方が公開講座の趣旨からいうと印刷教材なしで勉強されている。そうなりますと、印刷教材なしで放送授業だけでということになりますと、テレビを見るのと、あるいはラジオを聴く、それだけで勉強するのと同じですから、かなり感覚を変えていかなければならないと感じました。

北大の方が、いかに講師の思い入れ、熱意が大切かということを強調された。そのとおりだと思いますけれども、これはテレビに限らずラジオもそうだと思いますが、私の少ない経験でもやはり思い入れだけではだめだという感じがするわけで、そこに制作側の方の — タレント性というのは違うと思いますが、タレント性はどういうふうに解釈するかによりますが、テレビならテレビ、ラジオならラジオで、視聴者になるほどと訴え得るようなつくり方、しゃべり方、撮られ方があるので、そこをなかなかそううまくいかないのですけれども、それだけは最低限放送授業をやるためには、われわれは教えを請わなければならない。あるトレーニングを受けなければならないだろうと思っております。

非常に簡単でございます。

#### ○司会

ありがとうございました。

それでは緒方先生お願いいたします。

#### ○緒方（熊本県菊池市立菊之池小学校）

特別なのですが、テキストなしでの授業となりますと、はまって見ないとただ単なる娯楽番組みたいな感じで、たまたまスイッチを入れたら何かやっていたから見るという程度だったら長続きはしないし、途中であきたらほんと切ってほかのほうに行くか、チャンネルを変えるかということになってくると思います。だからテキストなしでも見れる一般視聴者のためだったら、先ほどから出ておりますように、その1回の放送のなかに大きなやまが必要になってくるだろうし、それをほぐしていくための映像のあり方といえますか、視聴者を引きつけていく、立って見ておいたらだんだん前にいって正座して見るというような引きつけ方が何かないかなという気がするわけです。それが中身であろうし、専門性でもであろうし、大学側のこれだけはこのこと、先ほどの北大の先生のほうからも出ておりましたが、そういうものも必要でしょうけれども、映像そのものに引かれるという点もあると思います。そのあたりどうしたらということとはわかりませんが、そのへんのところをちょっと

感じます。

○司会

ありがとうございました。

大塚先生お願いします。

○大塚（放送教育開発センター）

こういうモニター調査はなかなか難しいわけですし、2つの番組を1つの質問項目で比較するとなると、どうしてもグローバルな質問項目になってしまうわけですし、比較はできるかという問題ですけれども、比較は要するに学問的にはなかなかこうだと決めつけることはできないと思いますけれども、たとえば今回の場合でしたら制作の手法が違うという差が出てきたわけで、そのへんの評価はできるのではないかと思います。ただ、この2つの番組をとおして、制作手法というのは一定の水準をクリアしていればあとは利用法だと申しましたけれども、たとえば昨日ご覧いただいた「ローレンツ変換」などを同じモニターで見せましたら、ひょっとすると熊本大学の評価が高くなる。熊本大学のなかでもとりわけ理学部の評価が高くなるということは当然出てくると思います。そのへん番組そのものがわかるかわからないかということが、まず第一に重要なポイントではないかとは思いますが、それでもああいう「ローレンツ変換」などのコンピュータグラフィックスを駆使した工夫が取り入れられているところは、おそらく一般視聴者などにも評価されると思いますし、ある意味での感銘を視聴者に与えることができるのではないかと思います。そういったある一種の感銘を与えることが生涯学習、こういう勉強をしてみようというところにつながれば、それなりの意義は出てくるのではないかという気がいたします。

そういう意味で、一定の水準をクリアすればということをお先ほど申しましたけれども、放送大学の学生調査などでいろいろ見てみますと、放送大学の講義といいますのは、番組というより講義そのものでありますから、大学の先生が自分の講義の形態でやるということで、講師のバストショットしか写らないような講義もあるわけです。そういうような講義ですと、放送大学の学生、視聴者側の反感はかなりあるわけですし、あるいはテキストと放送と両方を主体にやっているわけですが、ある講師はテキストの棒読みで番組を進めてしまうという、放送というのは馴れていませんから、そういう講師もいるわけですが、そういうことに対する反感も非常に強いわけです。そういった反感がありますと、学習できるものもできなくなってしまう。そういった意味で講師あるいは制作側の誠意みたいなものが必要になってきて、その誠意さえあればそれなりに、いろいろな観点から学習する側に受け取られていくのではないかと思います。じゃ、どうでもいいかという、それぞれ制作する側にとってみれば、努力をしていくべき点があると思いますけれども、そうなりますと今回のような全体的な評価項目では不十分でありまして、一つひとつの内容についての評価項目、たとえば根と茎の違いがわかるかわからないかということばどのぐらい定着したかというテストみたいなものを入れるとか、そういったことで定着の度合をよくするための提示方法とか、そういうことで努力はしていくべきだと思います。

一つの重要な点は、放送大学でもそうですけれども、最後の単位認定試験、要するに評価が従来ど

おりペーパーテストという形で行われているわけですが、テレビなどのメディアを通じての評価ということになりますと、文字にならない部分の評価をどういう形でしていくかというのも今後の課題になっていくのではないかと思います。

○司会

どうもありがとうございました。

○井出（民教協）

パネラーの皆さんのご意見を聞き、フロアの皆さんの意見も聞きまして、時間もないので、私も2つ作品を見せていただきまして、また熊本放送にも何回も足を運びましたものとして、出来上がったものを見たうえでの感想を2～3ちょっと述べさせていただきたいと思います。

つめこみ慌ただしいという意見が小林先生をはじめ出ておりましたが、私は最初見たときは感じました。このへんは慌ただしい年末の中でつくった熊本放送さんに同情するのですけれども、私はあまりこれは重視しておりませんで、もちろんいい条件ということではないですけれども、割合これから微調整がきくところですので、私はそれほどこのところで問題にしたいのですが、それから水越先生からいいご指摘を受けました。もっともだと思います。

では何がきょうの実験的な試みで救いになるかということ、2本目の「野菜の形態学」で大塚先生の資料を見ますと、発見があったというのが「野菜の形態学」が一番多い。私はほんによかったと思ひまして、実はどちらがおもしろいかと、「野菜の形態学」の方に断然手を上げるわけですけれども、やっぱりおもしろかったわけです。これは制作していくものの一つの教訓というか、私はこんなふうに学んだという意味での意見ですけれども、この番組を自然科学系というふうにとらえた場合、きのう私一言言いましたが、テレビ的な尺度を一つ制作するものとして見つけていかなければならないということが一つあります。それから自然科学系の番組をおもしろくするもう一つは、歴史的な視点というか、あるいは私はこう考えてきたのだという視点が、公開講座にはなかなかなくて、知識だけを追っていくというところがありまして、これは是非入れていただきたいと思いますが、もちろんきのう「ローレンツ変換」で出たところですが、ああいうポアンカレとかガリレオでしたか、それからアインシュタインまで含めて、きざなことばで言いますと「ユリイカ」ということばがあります。これは「私は見た」という意味らしい。私は見たという連続のなかで話していくところが、大変きのうのところはユニークだったと思いますが、こういう歴史的な視点を是非入れていかなければいかんということがあります。

それからもう一つ、これが今回の作品に関係してくるかと思いますけれども、テレビというのは大変ウェットな情報の道具じゃないかと思うんです。そういうところに自然科学系のものをどういうふうにのせていくかということがいつも苦勞するわけですが、ウェットというのは早く言えば前頭葉に相当するような喜びとか、感動とか、楽しいとか、笑いとか、そういうものを大きな流れとしてつくって、それに側頭葉に相当するような数式なり定量的なものをちりばめていくというのも大変にこういう公開講座なんかでは生きてくるのではないかと思うのですが、そういう意味で今江先生が包丁を持ちまして、先ほど大谷先生もおっしゃっていたのですが、包丁を持って切りながら、一種



のわれわれから見るとウェットな画面づくりの中で、そういう知識をちりばめていくという手法は大変斬新に感じました。それと、一つの発見ということがおそらく結果に出てきたのではないかと思います。けれど、私はそのへんが実験的な意味では参考になりました。

ひとつ私の意見として言わせていただきました。

○司会

ありがとうございました。

ディレクターの笠さんはいらっしゃいますか。何かありますか。

○笠（熊本放送）

ばたばたで番組をつくりました笠です。

今度の場合、あらかじめ13回シリーズの第1回が「野菜は文化財」ということで今江先生の担当をお願いしたのですが、この番組そのものに関する反省とか、これをこうしたほうがいいのかというのが具体的にいろいろ指摘、あるいはわれわれが何かしましたらそれに基づいてもっと具体的に新しい番組をつくりやすいということがあったのですが、残念ながら今回はもっと普遍的な意味で、大学教育にもう少し近づけてみようというところから入って、その場として今江先生の番組が使用されたという具合になったものですから、そのへんで具体的な意味ではちょっとギャップがあると思います。実際「野菜は文化財」はわりとぼくとしてはいい番組ではないかなというのがあったのですが、とにかく大学教育にもう少し近づけようということで、思い切っているいろいろな演出は捨てて、ストレートにラグビーでいえばフォワードばかりで突っ込むという感じで、実証的に野菜を立て続けに出しては見せて教えるという形のタイプを先生にお願いすることにしました。クイズとか何とかもちろん考えられますし、その他VTRを駆使するような演出も考えられます。でも、それをしているうちに、何か最初と同じようになるような気もしたし、それより、先生がいつも情熱をもって語られますので、一番おっしゃりたいことを力説していただいて、ただひたすら野菜の形態について述べていただくというのでつくっていただきました。

はっきり言って、いつもどのへんに番組のレベルをおいてつくったらいいかというのにわれわれは悩むところで、そのへんについてほんとうは見る人が端的にそれを指示してくれる人がいたら助かなというのが実感です。

○司会

どうもありがとうございました。

それでは時間がそろそろ迫ってまいりましたので、もうお一方だけお受けしようと思います。

○山本（高知医科大学）

きょうのテーマの「生涯学習と大学教育の接点」ということですがけれども、問題は生涯教育に多様性があると思います。私どもは医学教育をやっておりますけれども、専門教育としての生涯教育、それから私どもが一般の市民に医学の話を講演に行くような、教養としての生涯教育という2本があると思うのです。それをどうしても1本にしようというところに無理があるような気がしますが、きょうの「台所の科学」とか、きのうの「メカニカル・ユニバース」とは全然異質の問題でありまして、

むしろこういう公開講座も長い経過を経て多くの番組ができましたので、そろそろ一般教養としての生涯教育と、専門教育と二本立てにして、たとえば一般教養の番組を見て、課題を与えて、それであるフォローをして次に専門教育としての番組を与えてあげるという縦の追跡も必要な気がします。そのあたりの追求をしていただければありがたいと思います。

#### ○司会

活用の多様性についても出ましたが、いまは番組自体の多様性ということについてもご意見をうかがいました。

私のほうからは実施責任者として、いろいろ発言したいところもございましたけれども、きょうはできる限りパネリストとフロアとの意見の交換ということで進めてまいりました。まだまだご意見があるかと思えますけれども、時間がちょうどまいりましたので、これで閉じさせていただきたいと思えます。

パネリストの先生方はお忙しいなかほんとうにありがとうございました。

また、フロアの先生方もどうもご協力ありがとうございました。

〔拍手〕

#### ○総合司会

どうもお疲れさまでございました。

以上をもちまして第2セッションを終了いたします。

#### ○総合司会

これからあと、閉会に移りますが、閉会を前に放送教育開発センターの天城勲所長よりごあいさつがございます。

#### ○天城（放送教育センター所長）

2日間にわたりますシンポジウムの、大変熱のこもった有意義な会の最終にあたりまして、私の立場から一言お礼を兼ねて申し上げたいことがございます。

別に2日間のシンポジウムの総括をする意味では毛頭ございません。今回は第5回でございますが、1回、2回と重ねてまいりまして、その間に参加していただく大学の数がだんだんふえてまいりました。この間に、一言で申しますと、この公開講座の内容が、私の強い印象ですけれども、お世辞でなく大変発展してまいりました。質的にもバラエティの面から見ても。それは、いくつかの点で言えるのですけれども、各大学の非常なご努力が端的に表れております。また、放送局のご努力も端的に表れております。

今回は十分に議論ができなかったのですけれども、放送ですから当然相手がなくてはいけなわけですから、視聴者と申しますか、モニターと申しますか、視聴者の面でも子細に見てまいりますと非常に大きな拡大とともに多様に富んできていることがわかります。そういう意味で一言で申しますと、大学教育の放送による公開講座というものは大変皆さんのご努力によって発展してきたということが痛切に感じられまして、私の立場から大変嬉しいと思えますと同時に、関係の皆さまのご努力に

あらためて深く感謝申し上げる次第でございます。

最初に申し上げましたように現在11大学、17局が参加しておりまして、最初は3大学から発足しましたが、すでに蓄積が143本ございます。それぞれが精を込めてつくった番組でございますので、貴重な遺産ができていくということも、この際お互いに確認しておきたい。必ずいろいろな形で今後生かされなければならない問題じゃないかと思っております。

敢えてこういう言葉を使わせて頂きますが、その進歩発展してきた理由には、大学間の目に見えない競争と申しますか、お互いに一番を競うという意味ではございませんで、相互の刺激が非常に大きな力になっている。何も一斉にスタートして用意ドンで走って一等を決めているわけではございませんけれども、お互いが非常にその点を十分理解していただきまして、それぞれ前列を見ながら、また将来の発展を考えながら、11大学の間でいい意味での相互刺激が発展をもたらした最大の原因だろうと思っております。競争のない社会は発展がないといいますが、いい意味での競争の代表的な成果であろうと思っております。一般的な感想でございますが、そのことをひとつ申し上げておきたいと思えます。

それから、2つのことだけ申し上げますが、たくさんのご意見が出たのですが、さっき思い入れということがございまして、先生たちの思い入れのことかもしれませんが、思い入れだけではうまくいかないという意見も出ておりますが、結局思い入れというのは先生が画面で熱を振ってれば思い入れだということではないことは当然でございますが、映像でございますから、そこには当然ディレクターが介在する。この先生のいわゆる思い入れとディレクターの思い入れ、この両者の合致したところがいい番組ができるだろうと思っております。私たち放送大学が始まる前から実験的にいろいろやってまいりましたけれども、卒直にいて担当の講師の方とディレクターの思い入れが一致するというケースは大変難しい。恐らく、現在の放送大学もそうですけれども、各大学、各地の放送局との関係においても、この面をめぐってはいろいろのエピソードがたくさんあるかと思っておりますが、学者というのは大変誇り高い人種ですけれども、ディレクターも同じなんです。ですから私は「ぶつかりあうぞ、と。仲良くけんかしてください。」ということを始めから申し上げております。この両者の誇り高い人間がうまく、仲良くけんかしていくといい番組ができるんじゃないかと。それが思い入れの形で表れるのではないかとこのように常々思っております。

これはここで申し上げていいのかわからないですけれども、たまたまさき資料をめぐってありましたら、こういうことを言う人があるんだなと思ったんですけれども、私は、番組で美人アナウンサーかあるいはアシスタントか知らないけれども、必ず出てくる番組が多いのですが、先生が一生懸命話しておりますと、「はい、野菜の本質がよくわかりました」というんです。私はそう簡単に野菜の本質がわかりましたと相槌うつのはいかがかと思うのですが、アシスタントの使い方は大変難しいので、きょうもどなたかのコメントに、紙に書いた方に「はい、野菜の本質がよくわかりました」とおっしゃる。こういうのはディレクターのある程度の手法になっているのかもしれませんが、前から気になっているのです、こういう言い方について。きょうまたけたよけいなことを申し上げました。これはまさに余計なことでございます。私が言わんとする本質的なこととは関係のないこととご

ございます。あとでディレクターから反撃をくっておこられるだろうと思っております。それも是非聞きたいと思います。

もう一つ本質的な問題がございます。

おかげで放送教育開発センターも、本年で10年を迎えます。これは放送大学の設立に先駆けて万端の準備をしようということで始まったわけでございます。その後放送大学も発足いたしましたし、私たちは私たちなりのいろいろの研究開発をいたしておるわけでございますが、いずれにしても10年一区切りになったわけでございます。そこで非常に具体的なことから入りますが、このシンポジウムは主催している大学の間を順番に回っていくという申し合わせで発足したわけです。途中でいろいろなことがあって1年おきにしようということも考えたこともありましたけれども、順番でいきますと来年は大阪大学と毎日放送にお願いすることになります。それには準備が必要なわけでして、いつもシンポジウムの最後には次期の主管機関が決まるわけです。今回もそのことは当然頭においておったのですが、それに対してちょっと私のほうで考えがございますので、このことを申し上げたいと思います。

実は大変申し訳ないのですけれども、少なくとも来年は大阪ではなくて、東京でやろうと思っております。先ほど申したように10周年の記念をやりたいということで、開発センターの10周年の記念行事を含めてのシンポジウムを大阪大学と毎日放送さんをお願いしてしまうというのはどうも本末転倒しているということが一つと、もう一つは、10年の締め括りを何かしたい、将来に向かっての発展を考えたい。放送大学も本年で学年進行がワンサイクルするところで、来年の春には何名かの期待される卒業生が出るというちょうど時期を画するときでございます。それを考えておりましたのですが、なかなか話が固まらないのですが、一つわれわれの間で今議論しておりますのは、これも言葉がいい言葉ではないので誤解しないでいただきたいのですけれども、簡単に言うと、この11大学を中心にした番組のコンペを来年はやったらどうかという話が出ております。このコンペというのは何も競争して一等を決めようという意味では毛頭ございませんで、先ほど申したように143番組の蓄積がございます。最近は大変各大学の、あるいは各放送局のご努力によって素晴らしい番組ができておりますので、これをその地域だけで放映したり、その地域だけで処置するにはちょっともったいないんじゃないか。これをしかるべき機会にもっと広く使う方法はないかと前から考えておったところでございます。それから各局でも各大学でも、ほかの大学、局の番組を利用したいというお話もございまして、著作権の処理上ややこしいことがございまして、民教協ともやっとな話がつかままして、現在皆さんのご存知のとおり、一応われわれの放送開発センターと民教協との協約のもとに、私のほうで一応お預りして大学の要望によってお渡りする。結論は大学にほかの局の番組がいくという形になっておまして、皆さんもご覧になる機会が多くなっているだろうと思っておりますが、もう一歩進んで放映できないかということがわれわれの前からの考え方でございました。どれを放映するかといっても大変な話でございますし、何よりも放映すると金がかかるものですから、そのことを考えてちょうど10年目だから代表選手を選んで、その代表選手が日本中にお目見えしたらどうか。そういう考え方をもっているわけです。これはもちろん民教協との関係がございまして、民教協は民教協と

しての組織がありますから、ここの理事会等のご議論を経なければならないのですが、事務的には、アイディアは非常にいいのではないかと。具体的な幾つかの問題はあるけれどもクリアーしてみましようということで、私の方からやりましようよとって、民教協にお話しているところなのですが、これが一つ考えられております。

それには、63年度の番組だけにするか、過去の143本まで遡るかという両方の議論もいたしておりますけれども、選考の問題が大変なものですから、そういうロジスティックな点も考えまして、一応63年度の番組を中心とするけれども、やり方は、実は各大学・局から1本ずつ自慢になるのを出していただく。東京・幕張にはラジオ・テレビで若干数が違いますけれども11大学分が集まる。それを公平に審査しよう。その審査の仕方は、大学の公開講座という意味から、単に番組だけではなく、印刷教材のあり方、それから視聴者に対する影響等を含めた総合判断をしようと考えておるわけです。単なる放送番組のコンクールではない、このプログラムの趣旨に即したコンペをしたらどうかと考えておるのでございます。それと関連して一応63年度分を中心にするけれども、各大学、あるいは局で考えてみたら過去に素晴らしいものがある。こっちの方が非常に特色があって是非出したいということがあれば過去に遡ることを妨げるつもりはございませんが、さっきも申した全体の量が多いものですから、一応63年度分を中心にしていただいて、過去に遡ることも妨げないというぐらいいにして、各大学・局で1本ずつチャンピオンを出していただく。全国から集まったうえでコンペをしようと考えているところでございます。

最後にお話が出ました、この番組の中にはある意味で大学の立場からみると、いわゆる教養番組的なもの、あるいは大学で利用する場合に一般教育向きの番組もあるし、極めて専門的なものもあるし、必ずしもそのへんがはっきりしなかったり、最近では学際的な総合科目にあたるものもいろいろございますから、さっきご質問が出て、今後どうするのだというお話もございましたけれども、これはこれとして一つの課題ですが、番組もそういういろいろな種類がございます。コンペをやって一つだけにするのかという議論がある訳ですけれども、このへんはわれわれいろいろ議論しております、たとえば番組として非常に優秀だというものもあるかもしれませんけれども、あるものは印刷教材として素晴らしいものがある。独立しても立派な出版物になっているものがある。あるいは公開講座としての地域の普及状況は、県内の市町村等との協力によって一種の社会教育番組として非常に定着しているところもある。いろいろな見方もございますので、コンペの賞は1本にするのか、あるいはそれぞれの特賞をつくるのか、いろいろな議論を現在やっているところなんです。

いずれにしても、10年目を境目にしてそういうことをやってみたい。その判断も過去のことを振り返るだけではなくて、将来の大学の公開講座のあり方を展望して、将来へも目を向けた見方をこのクライテリアに入れて判断していただくという議論が進んでいるところでございます。少なくともここでいつも決めなければならない次回の会場を、大阪につきましては大変ご熱心に心がまえをいただいているようでございますけれども、申し訳ございませんが、来年は東京でさせていただくと。再度の機会にまたお願いしよう、事務的には若干お話ししてございますけれども、そのことを願うことと、それから10周年という記念を行事として東京でコンペだけかどうかわかりません。い

ろいろなことを考えておりますけれども、なかなか名案ができませんですが、少なくともコンペはやってみたいということを、これは半分は私たちの願望でございますが、半分は皆さん方に問いかけをしているわけでございまして、とんでもない、そんなことはやめろというご議論があれば我々も考え直さなければいけないのですが、ご賛同を得ればこの方向で進めてみたいと思いますし、やるについてはこういうことをやったらどうかというご議論も是非いただきたいのです。

実は時間がなくて、セッションの時間が非常に詰まっておりましたから、途中で申し上げる機会がなかったのですが、最後に時間をいただきまして、以上のことを私たちの率直な考え方と、皆様方の積極的なご意見をいただければ幸いだと思っております。

ここで皆様方のご意見をいただければ幸いですけれども、なかなか時間がないと思いますので、基本的にこの方法でご了承いただければ、あらためて皆さん方に細かいご意見をいただきたいということで、ご了承いただければ幸いだと思っておりますけれども、いかがでございましょうか。

〔拍手〕

○天城（放送教育センター所長）

ありがとうございました。

閉会の辞というよりもよけいなことを申し上げましたけれども、そのことを申し上げまして、あわせて私たちセンターとしてのお礼を申し上げて閉会のことばにかえさせていただきたいと思いません。

どうもありがとうございました。（拍手）

○総合司会

ではこれもちまして第5回放送利用の大学公開講座シンポジウムをすべて終了いたしました。皆さまお疲れ様でございました。

(参考) 第2セッション配付資料

「生涯学習と大学教育の接点を求めて」

1. はじめに <司会>  
江藤 孝 (熊本大学学生部長)
2. 担当講師の立場から <パネリスト>  
今江 正知 (熊本大学教養部教授)
3. 制作者の立場から  
光 永 一 三 (株式会社熊本放送  
テレビ局制作部長)
4. 放送大学の立場から  
小 林 靖 雄 (放送大学副学長)
5. 一般視聴者の立場から  
緒 方 良 雄 (熊本県菊池市立  
菊之池小学校長)
6. 番組モニター・アンケート調査結果報告  
大 塚 雄 作 (放送教育開発センター  
助 教 授)

## は じ め に

熊 本 大 学 学 生 部 長

江 藤 孝

各大学は、昭和53年10月に国立大学共同利用機関として設置された放送教育開発センターの依頼を受けて、「放送利用の大学公開講座」を実施してきたが、本年度ですでに10回を数えるにいたっている。

この間、当初は東北、金沢及び広島の三大学にとどまった実施大学の数も、昭和55年度に大阪及び熊本の二大学が、昭和58年度に北海道大学が、昭和59年度に新潟大学が、昭和60年度に名古屋大学及び信州、琉球の二大学群が、さらに昭和61年度に四国地区の大学が実施を開始し、八大学・三大学群に拡大している。

そして、各大学は、これまで、放送公開講座の実施を通じて、放送メディアの特性を最大限に生かしながら、いかにして大学教育の開放を促進し、生涯学習の要請に応えることができるかを摸索してきた。また同時に、大学における教育方法の改善の一環として、放送公開講座の大学教育への活用についても検討を試みてきた。これは、まさしく「生涯学習と大学教育との接点を求めて」の歩みであったといつてよい。

そこで、このシンポジウム第2セッションにおいて、大学教育の開放の視点から生涯学習への接点を求めた、昭和62年度の熊本大学放送公開講座テレビ科目「台所の科学」（主任講師・有富正和教授〔教育学部食物学〕）の第1回「野菜は文化財」（担当講師・今江正知教授〔教養部環境科学〕）と、生涯学習の視点から大学教育への接点を求めた、実験番組「野菜の形態学」（担当講師・今江正知教授）とを手掛かりとして、第1セッションの討議と3種類のモニター（「熊本の一般視聴者」、「熊本大学の学生」、「放送大学の学生」）へのアンケート調査結果等を踏まえ、会場の出席者の参加も得て、生涯学習への活用と大学教育への活用という2つの課題に適応した放送公開講座のあり方を探りたい。

まず、パネリストのうち、今江正知熊本大学教養部教授が、「担当講師の立場」から、「野菜は文化財」と「野菜の形態学」との両番組につき、学習のねらいや番組と印刷教材との関連等について解説し、さらに、同教授を主任講師として実施した、昭和60年度の



熊本大学放送公開講座テレビ科目「水と人間」の授業への活用についての調査研究結果をも踏まえて、生涯学習と大学教育という2つの課題の視点から両番組の活用について検討を加える。

つぎに、光永一三熊本放送テレビ局制作部長が、「制作者の立場」から、両番組ことに実験番組につき、制作のねらいや放送メディアの特性（映像・音声）をどのように生かそうとしたか等について解説し、さらに2つの課題の視点から両番組の活用について検討を加える。

さらに、小林靖雄放送大学副学長が、「放送大学の立場から」、一般視聴者としての眼をも加えて、放送大学のねらいと放送公開講座のあり方をめぐり問題等に言及し、さらに2つの課題の視点から、両番組の成否について意見を述べる。

また、緒方良雄熊本県菊池市菊之池小学校長が、「一般視聴者の立場」から、県の社会教育行政にたずさわった経験をも踏まえて、両番組を中心に、放送公開講座のあり方そのものについて意見を述べる。

最後に、大塚雄作放送開発センター助教授が、両番組をそれぞれ独立に「熊本の一般視聴者」、「熊本大学の学生」、「放送大学の学生」の3つのグループに視聴させ、アンケート調査を実施した結果を報告し、番組制作上の違いがモニターにどのように受けとめられたかを探り、生涯学習と大学教育との接点を求めるということに関するいくつかの知見を提供する。

## 担当講師の立場から

熊本大学教養部教授

今江正知

昭和60年度に製作した熊本大学の放送による公開講座「水と人間」を、総合科目の1テーマ（通年、4単位の講義）として実施した。VTRなどの視聴覚教材をときどき講義の補助手段として使用することは普通に行われているが、45分×13回の全体をまとめて使用するとなると、VTRが1年間の講義の中心に座ることになり、いろいろな問題が

出てくる。その問題点や61・62年度と2年間実施した中で気づいたこと考えさせられたことについて報告する。

### 授業の形態

13回の個別テーマ毎に2回の講義時間をあて、その1回目に45分のVTRを視聴させた。したがって、45分のVTR視聴に対して200分の授業時間が配当されたことになる。そして、VTRを視聴したらすぐに、その内容について文章化させる作業を行った。これは、VTRを真剣に視聴させる手段であるだけでなく、文章化させる作業そのものが一つの目的だった。また、この作業は予期以上に重要な効果をあげた。2回目の時間は、とくに形態を定めず担当講師の好みの形で行ったが、1回目に学生が書いたものを基にしての講義が多かった。

### 学生の反応

まず、驚いたことは学生たちが実に熱心にVTRを試聴することである。全員の視線がブラウン管に集中している。この映像が持つ力は今後十分に認識すべきものであろう。

しかし、映像によって示されたから分かりやすいとか理解できたという学生の意見は、注意して聞かなくてはならない。というのも、論理的に説明できる本当の理解ではなく、感覚的に判ったつもりになっていることが多いからである。また、良く出来た映像教材は、素直に判ったつもりになるが、それは表面的理解に留まって記憶から抜け落ちることも多いように思える。

深く理解し長く記憶にとどめるには、苦勞して理解する作業が不可欠なのかもしれない。目で見、耳で聞いたことをメモし、直ちに文章化する作業は、その意味でも重要である。

現代の学生は文章を書くのが苦手である。とくに、客観的な事実の記録や論理的に意見を述べるのが苦手である。相手に読んで貰い相手に理解して貰う文章を書くという意識すらなく、自分の感じたままを文字にして、それに共感するか否かは相手の勝手と考えているようにすら思える。しかし、毎回文章化させ、書いたことを話題にしていると、次第に内容のある文章を書くようになってくる。

また、文章化の作業は、学生たちの誤解を顕在化させる利点もある。

講義の中心にVTRを据える授業は、今回の「水の人間」ではほぼ成功しているといえる。これは、この講義が「水という身近な存在を改めて見直し、水と人間の関係を問い直すことによって、水問題の重要性に関する認識を深める」ことをねらったものなので、映像の利用がとくに有効だった。しかし、それ以上に授業の実施にあたって全講師の理解と協力が得られたことが重要である。

## 制作者の立場から

株式会社熊本放送テレビ局制作部長

光 永 一 三

### 生涯学習の必要性

平均寿命の伸長と共に、社会教育、成人教室、高齢者学級など、生涯学習に対する認識が高まってきている。

これは、余暇時間の有効利用といった、やや、消極的な動機からの生涯学習への関心であるが、更に進んで、社会生活での必要から制度的な学校教育を終えた後、新しい知的分野へと挑戦するため学習の手段を考えるものもある。

情報化社会といわれる今日、社会状況の変化は目ざましく、古くからいい慣わされた「10年ひと昔」が、今では「3年ひと昔」とも、更にまた、一年間に社会に流される情報の中15%は1年間で陳腐なものになるという（「生涯教育論」麻生誠著より）、この計算からすると、7年間の中には全ての情報が陳腐なものになってしまうということであり、真剣に社会の第一線で生きていこうとするものにとっては、学習というものは生涯止めることの出来ない社会活動ということになる。

こうした社会情勢、時代的要求から最近急速に生涯学習の必要性が高まってきた。

### 大学教育との違い

物事の真理を求めることに於て、制度的教育・大学教育も、社会教育の一つである生涯

学習も、その目標は変わらないが、手段、方法はいくつかの特徴的な相違がある。

大学教育においては、物事の真理を、原則的、系統的に究明、整理していくが、社会教育では、その性格上、結論的、結果的に物事の姿を把握しようとする傾向がある。

生涯学習と大学教育との接点をどこに求めるか

こうした教育の手法上の違いを越えて、二つの教育の接点を求めたのが今回の実験番組である。

実験番組においては、学問的満足感を学生に与え、知的充足を一般視聴者に与えるように努めて制作を行った。

手法上の違い

二つの番組において、制作する上での、手法上の違いはあったが、基本的な点で番組の本質は損なわないよう留意したつもりである。

## 放送大学の立場から

放送大学副学長

小林靖雄

かねてから「放送利用の大学公開講座」のシンポジウムに参加してきて、かつ某大学の59年度の実施内容につき詳細に調査をさせて頂いた経験をふまえると、この「大学公開講座」の番組は、放送大学の狙っている生涯学習としての大学教育にそのままふさわしい内容をもつものが多いと考えていた。地域特性をとらえた講義も、放送大学の全国化を考えた段階では、当然好ましいものと思える。

さて今回の私の役割の一部としてあてられた熊本大学の「台所の科学」（第1回野菜は文化財）、および熊本放送制作テレビ「野菜の形態学」について、私自身食物論の専門知識は全くなく、ただ一視聴者として意見をのべるにすぎない点をお断りしておく。

まず熊本大学制作の「野菜は文化財」については、印刷教材はかなり丹念に図表も多く記述されており、放送授業はそれを要約し、アナウンサーとの対話方式で要点的に、画像を豊富につかって説明されており、よいと思う。

さらに、たとえば「起源と伝播」については、逆に印刷教材には図表のみ豊富に示され、説明文は簡単にされているが、放送授業の方でかなり説明を補っておられ、印刷教材と放送授業の相互補完性を十分考慮されたものと思う。

全体的に、大変すぐれたもので、市民への開放講座として興味をもたれるものと思うし、放送大学の授業としても良いものと思はる。

次に熊本放送の制作された「野菜の形態学」は、同じく今江先生が出演されているが、基本的に根・茎・葉の三形態を中心に各種野菜をとりあげ、植物学的な説明をされているものである。拝見して全体の調子がかたいもので、これは故意にそうされたのかとも思われる。

画像は実物もしくはスライド写真等を用い、丹念な説明が行われているが、内容が多すぎて話の速度が速く、せわしい感じがした。時間との関係でもう少し内容を絞られて、ゆっくり説明をされる方が、視聴者にとって印象が深く、理解を助けると思う。

なお今日の所放送大学では、印刷教材にまず中心をおき、それをもとにして限られた時間内の放送授業（特にテレビ授業）をどのように整理し編成するか、ディレクターとのかなりの検討をするのが一般であり、今回の「台所の科学」のような、「相互補完性」の検討は、まだ不十分であると思う。今後の課題である。（61年度から放送教育開発センターの実験は行われている）

## 一般視聴者の立場から

熊本県菊池市立菊之池小学校長

緒 方 良 雄

熊本大学で「放送利用の公開講座」が実施されて第8回を数える。その中で大きな特色の1つに学外における地方公共団体の実施する社会教育活動との連携・調整に留意されたことが上げられる。

即ち、講座と社会教育活動との役割分担を互いに確認し調整したうえで、社会教育活動と連携しながら講座を効果的に運用されている点である。

それは、実施委員会に県・市の社会教育課長を加え、大学の立場と社会教育の立場とを円滑に結びつける役割をもたれたことは、「生涯教育と大学教育との接点」をより確かなものにするうえでも重要なことである。

放送公開講座は「大学のもつ高度な学術的研究」を地域社会に開放することが重要な課題である。もちろん市民の要請に応えるための県や市の実施する社会教育活動とは本来その視点を異にはするが、地域の課題をどのように捉え、それを公開講座にどのように盛り込むかは最も大事なことである。だから真剣に取り組まれてきたし、その苦心のあとを伺うことができる。

地方公共団体が実施する社会教育活動の場合、自分の生活課題や住んでいる地域の課題でないと受講したがる傾向がある。勿論公的機関が実施する社会教育活動であるから、そのような生活課題や地域課題を掘り起こし、みんなで学び、その解決策を見出していく、その過程で学習者の連帯感を醸成していく、しかも学習したことを社会に還元していく、いわゆる公人を育成するというねらいがある。

また昭和61年度のアンケートの結果から熊本大学と全体とを単純に比較してみると次のような特色があげられる。

- (1) 受講生の性別では、女性が圧倒的に多く全体と逆現象を起こしている。
- (2) 年齢も高齢者が殊んどで、各年齢層に満遍なくいる全体と対象的である。
- (3) 学歴においては、小・中学校卒が全体の4倍もあり、しかも主婦が断然多い。

(4) 講座を知った媒体も大学の案内もかなりあるが、市町村の広報が半分を占めている。このようなことから本県の場合、小・中学校卒程度で女性の高齢者が受講している。しかも市町村の広報で知った人たちが、テーマを見て受講している。内容については満足もしているし、理解もしている。

そこで社会教育の立場から、今後の講座のあり方について述べると、

- (1) 地域課題を盛り込んだ内容で受講生も満足しているが、もう一步突っ込んで、地域の住民を引っ張り出すことはできないだろうか。
- (2) 普遍的なものの中に地域的なものの導入はできないか。野菜の学習の中に農薬の問題、生産者や消費者の立場を織り込むことは困難であろうか。
- (3) 現地見学等は受講生の意欲づけに大変意義あることである。家庭で一人で視聴している姿は寒々とした感じがする。スクーリングはそれを救う方法としても意義のあることだが1回目より2回目が減少しているのは何が原因か説明の必要がある。
- (4) 受講生の年齢層からみると、放送時間はそう問題ではないだろうが、50才未満の受講生が少ないのは視聴しにくい金曜日の午前9:30~10:15という時間帯に問題がありはしないか。
- (5) 楽しさも必要である。苦痛であるならばテレビは見ないし、45分は受講者にとって長く感じないだろうか。
- (6) テキストも平易で、わかり易く考えてあり、すばらしいスタッフがそろっていて、ていねいに解説されているが、やゝ一般向きで、ターゲットをどこかにしぼる必要はないだろうか。
- (7) 「熊本大学放送公開講座」受講案内とは少し堅苦しくはないだろうか「だれにもわかる熊本大学のやさしい講座」?のように親しみやすく、受講してみたい意欲がでるような呼びかけ・PRが欲しい。

# 番組モニター・アンケート調査結果報告

放送教育開発センター助教授

大塚雄作

## 1. 目的と方法

生涯学習の一助として、大学教育を一般視聴者に公開するという方向性をもった放送公開講座「野菜は文化財」と、生涯学習という視点から、大学教育としても供用しようという方向性をもった実験番組「野菜の形態学」を、それぞれ独立に、「熊本の一般視聴者」、「熊本大学の学生」、「放送大学の学生」の3つのグループに視聴させ、アンケート調査を実施した。ここでは、番組制作上の違いが、モニターにどのように受けとめられたかを探り、生涯学習と大学教育の接点を求めるということに関するいくつかの知見を提供する。

## 2. 調査の構成

生涯学習に望まれる学習の効果としては、生活への実用性の高さ・一般的な教養の向上・知的好奇心の満足・勉学そのものへの内発的動機づけの持続といった点があげられる。一方、大学教育では、ある領域に関する知見を専門的に深め、原理的・理論的に体系だてていくことが望まれる。しかし、これらは、相容れないものではない。学習は最終的に自分一人で行うものであり、自ら学び続ける意欲と方法を育て得る教材であれば、そのいずれにも利用が可能となろう。そのような観点から、評価項目を適宜設定した。

## 3. グループの特徴

一般視聴者と放送大学学生は、中年の主婦層が主体であるが、放送大学学生は卒業志向性がある点で違いがある。熊本大生は、さまざまな学部の1年生が主体となっており、若干男性が多い。また、熊本大生は、教養志向性、各種学習手段の利用度、野菜への興味といった点で、他の2グループより低レベルとなっている。

## 4. 調査の結果（配布資料参照）



全体的に、番組の差よりも、グループ差が大きいという結果が得られた。いずれの番組も、わかりやすく、新たな発見もあって、興味深い内容であり、番組制作上、映像なども有効に利用されており、教養番組として適切であるという印象が得られている。ただし、その傾向が熊大生でやや否定的な方向にずれているところに、一貫したグループ差が見られる。以上のような観点に比べると、視聴者自身が考える余裕、次の学習へと結び付けるための足がかりといった点で、物足りなさが感じられる結果となっている。一方、専門的用語の利用度、内容の豊富さ、大学の講義らしさといった点では番組差が見られ、実験番組の意図を一応反映した結果が得られている。なお、性差もかなり見られ、特に、野菜への関心度によって、評価がかなり影響される点に留意すべきである。さらに、自由記述欄の感想を見ると、相反する意見が数多くみられ、すべての人に納得いく番組作りの難しさを思わせた。番組制作上の最低限の技術、学習者の側の一定の理解といった、いくつかの水準をクリアすることを条件に、学習者の側の多様性に応えるべく、さまざまな種類のソフトウェアを作成、蓄積していくことが望まれよう。

(注) この番組モニター・アンケート調査結果報告の付属資料については、本書Ⅲ. 調査研究の「自己学習における放送教材の利用とその評価についての一考察 付録資料」の P. 292 ~ P. 315 と重複するため、そちらを参照願いたい。